

歴史は、永遠のいのちを目指す

永安 幸正

目次

- 一 国家への忠誠心とは何か
 - 二 自己責任と国家責任の関係——もうひとつの思考実験——
 - 三 戦争は国境を越えて人間愛を生むのか
 - 四 グローバル時代、忠誠心の構造が変わる
 - 五 歴史における郷土の形成、家系の永続、信仰の働き
 - 六 歴史における個人の悟りとは
おわりに——未来を拓く歴史討論を——
- 謝辞
- 『歴史論ノート』完結にあたって（大野正英）

一 国家への忠誠心とは何か

43
ボランテニアや生業や宗教活動などに一心不乱に精魂傾けている人を見ると、羨ましいな、と思う。私はどうも心が「揺

らぐ」性質の人間であり、「これでよいのか」と、いつも悩みながら歩いてきた。一心不乱に心を傾けるものが見つかったようで見つからない。

福沢諭吉のように、幸せとは、揺らぐことなく、「生涯かけて情熱を傾ける仕事を持つことである」ともいえる。また、偕老同穴という言葉があるが、神前で一旦夫婦の契りを結んだならば、揺らぐことなく、身を終わるまで相手の人格に尽くしたものである。

ある人物のことである。明治二〇年代、山間の村に生まれ、分家して何の財産もなく、おまけに相次いで二人も奥さんに先立たれ、実の子供が授からず、兄の娘をもらって孫が出来、その孫たちを心から可愛がった。しかも、長年の激しい仕事か

崇たかつて神経痛に苦しみ、苦しみながらも、山に登って子孫のために木を植え、みんなから好かれて大往生だいおうじやうして逝いった老人がいた。三十歳前半で逝いつた二人の夫人の御霊みたまは、今どこで、どうしておられるのか。

また、時代を現うつして無我無私むがむしの哲学と理論を求め続け、ついに「純粹じゆんすいな宗教的境地きやうちともいえるマルクス主義」に辿たどり着き、大東亜戦争の敗戦を聞き、満足して幽明界ゆうめいかいを異にした経済学者もいた。

立場は全く異なるが、戦争中は日本の国体の研究とその精神の実践に打ち込み、若くして洛陽の紙価しにかを高める書物を著し、武運ぶうんつたなく日本が敗れると、教職きやうしやく追放の身となり、昭和二十七年の講和条約に伴う追放解除までしばらく苦節くせつの生活に耐えながら、決して真理探究しんりたんききゆうの火を絶たやすことなく、学界に復帰し、倒れるその日まで歩みを続けた社会哲学者もおられた。永遠のいのちに到る人生は、まさしくいろいろ。いずれも苦楽多様らくたふよう。

いのちには、いのちのベクトル——方向を持った矢——というものがあつた。自分は自分であるとするアイデンティティ（自己同一性）であり、その方向性である。それは、実は古来、「忠誠心ちゆうせいしん」(loyalty, devotion) と名付けられてきた心の働きで

あつて、歴史の変化発展とは、その忠誠心のベクトルの組み直しにほかならない。

忠誠心という言葉は、最近あまり聞かれなくなったが、それは自己のいのちや心身を何かに捧たかげるといふ精神であり、献身けんしんあるいは献心けんしんといえるものであつて、自己の信念しんねんにおける不可欠の主柱である。

ご存知のように、一九六〇年代のアメリカ大統領、ケネディ（一九一七カラ六三）は、

「諸君、国家から何かをしてもらいたいというより、国家に何をしてあげることができるか考えよう」

とアメリカ国民に訴うえかけたが、それは忠誠心の問いかけのことであつた。

ところが、今日進行中のグローバル化は忠誠心を変質へんしつさせるかのである。特に国家への忠誠心というものを、かつて人類が経験したことがないほどに崩壊ほうかいさせる。崩壊とまでは行かないにせよ、ある部分を削り取つたり、穴を明けたり、腐食させたりする。挙句あげくの果てに、国民としての道義どうぎとか倫理道徳りんりだうとくというものを揺るがす。大黒柱だいこくちゆうの欠けた家のようにである。

国民というものを単位として成り立つ国家が「国民国家」(national state) であるが、世界史の中で国民国家というもの

の歴史は思ったより古くない。

ヨーロッパの中世では、世俗の王の支配する国家といえども、すべて独立でなく、カトリック・ヴァチカンのローマ法王（教皇）が地上の価値の一切を取り仕切っていた。人は法王を通じて神と繋がり、神に忠誠を誓い、神に献身するという神聖国家、つまり「神の国」(civitas Dei)であった。政教一致であり、宗教と国家とは分離していなかった。政教分離は新しい「建て前」である。

しかし、やがて、そこから各地の世俗の王が、法王から独立し、世俗社会の支配権力を掌握し、税や関税を徴収する権力、戦争のときに兵を募り国防を行うという権力、を手にいれた。国家という団体組織を造った。

こうして近代になると、国民集団は、この国王に献身するという精神で、人々は新たに国家への忠誠心を抱くようになった。国民として国家に向ける忠誠心は、宗教上のローマ法王への忠誠心とも、何々王家への忠誠心とも異なり、まさに国家への忠誠心となるのである。これが「ナシヨナリズム」（愛国心）というものである。

日本の江戸時代の国家は、奈良・平安時代からの律令制の下、象徴的な天皇・皇室と朝廷（政府）を三位一体として戴

きながら、幕府が実質的な政府——立法・行政・司法を動かすもの——であり、一種の国民国家であった。朝廷の役割は、ヴァチカンに相当し、国民のために祭司を行うことと、位階・爵位を授けることだけであったといえよう。

これは一部分、イギリスの国家体制と似ていた。イギリスでは、徴税や上訴権を巡ってヘンリー八世がローマ法王と対立し、ヴァチカンから独立し、イギリス王が最高司祭となつて、一五三四年に英国国教会（アングリカン・チャーチ）を結成した。こうして、国王が最高祭司を兼ね、その下に立法府が存在し、首相 (prime minister) が議員の中から選ばれ、首相の選任する大臣 (minister) をもつて政府が構成される、というイギリスの君主制國體（国柄）が形成された。日本の國體は、形の上ではイギリスのそれとおおよそのところで似ている。

日本の幕府では、イギリスにおけると異なり、国会と内閣のような行政組織とが分立していなかった。立法と行政と司法という役割をそれなりに統合した機構であった。日本には、奈良・平安の律令制以来の伝統があり、国民国家としては、英国と比べてはるかに古く長いのである。

こうした国民国家では、国民の忠誠心というものは、以下の

ように重層的である。

第一に、国民個人の自己自身への忠誠がある。

どんな個人であれ、個人は個人として自己の人格、自己の人生そのものに対して、忠誠心を懐く。中には自暴自棄となって自死——まじめな自死もあるが——という道を選ぶなど、自己を大切にしない方々もあるが、それはごく少数である。覚悟の殉死は、自己を粗末にするものではなく、自己を完成するものである。

第二に、個人は家(家族・祖先の系列)に対して忠誠心を懐く。家に対する忠誠は文化によって異なる。しかし、系列を尊重することは各民族に共通する。日本に限らず、いのちの系列である家系を辿ることを重視する文化では、家といういのち集団への忠誠心は強固である。家に対する忠誠心は、親祖先の魂への崇拜・感謝と、同時に子孫繁栄を実現したいという未来への希望にある。

家に対する忠誠心は、家族の存続という基礎的ないのち集団の永續発展に対する願望にほかならないから、この意味では人類のあらゆる文化と国家において、共通に見出される基礎的精神の方向性といえるであろう。どこの民族を訪ねても、まさ

か、子孫繁栄は人類の共通価値(コモン・ヴァリュー)であり、それを願わない人など例外的でしかないであろう。

第三に、国家に対する忠誠心である。

一体、国民として国家に忠誠を誓うということには、どんな内実があるのか。それは以下のような柱から成るといえよう。

①国民の忠誠心は、祖国の国家主権へのそれを根本とする。

現代の国家は、一国では存続できず、安全保障や貿易・投資など世界的な相互扶助のネットワークの中でのみ生きることができるとは、しかし、他国に譲り渡すことのできないものがある、自国の運命は最終的には自国自身で決めるといって「国家主権」がそれである。統治権という言葉を使う方がよくて、主権という言葉をやめてしまおうという意見を唱える人もあるが、それには賛成できない。

国家主権とは、国民といういのち集団自体が存在する権利である。

普通の国民は他国に対するよりも、祖国に対しての方が、より強固に忠誠心を抱く。いくらグローバル時代といっても、この意味の祖国への忠誠心は、なお一切の忠誠心の土台であり続ける。人々がいのちをかけて奉仕するのは、やはり祖国に対し

てではないか。

ヨーロッパ各国では、EC（ヨーロッパ共同体）からEU（ヨーロッパ同盟）へと発展して団結しようとしているが、他民族の移民を排斥しようとする「新右翼」の台頭に頭を痛めている。それは拡大される「同盟」への新しい忠誠心に対し、古くから存在する自民族への忠誠心が反抗するという現象といえる。EUという同盟（新しい国家）は、国家国民集団としては未成熟なのである。

とはいえ、人は悲しい存在である。平和な時にはそのメンバーは国家のことなど思い浮かばない傾向がある。いのち集団が危機に陥り、国家が侵略に出合わない限り国家の恩恵など知らない。国家という船が壊れたり沈んだりすれば、大多数の人が難儀するというのである。

② 祖国への忠誠心の決め手は、国防と治安への奉仕にあり。

これは、ソフトな文化への忠誠心どころでなく、はるかに重たい忠誠心を求められる領域である。これは忠誠心の極致であって、自己のいのちを捧げさせるほどの忠誠心である。特に国防は、国民が国家のために「いのちを捧げる」分野であり、国民が同胞であることを最も徹底して証明する分野である。真の友、真の朋友とは、そのために自己のいのちを懸ける

に値する人のことである。

国家への忠誠心とは、国家という範囲での公善・公共財——安全保障をその根本とするもの——への忠誠心であり、特に外国からの侵略によってそれが犯されるようなときに、その忠誠心は目覚め、燃え上がる。領土・国民・国家主権が侵略されるとか、ミサイルで攻撃される、国民の仲間が拉致される、などの場合である。

自己の真の友とは、いのちを懸けて呉れる者だということからすれば、戦場に赴く兵士から考えると、自分がいのちを懸けて守ろうとする祖国の国民同胞は真の友なのであり、守ってくれる兵士は守られる国民にとっての真の友なのである。

また、銃後の国民も、戦場に出てこそ戦わないけれども、総力戦体制下では、「欲しがりません、勝つまでは」と厳しい節欲の暮らしを心掛け、また進んで節約と禁欲と勤労を実行する。工場に出かけて兵器生産に心を傾け汗を流す。非常時には、戦争に勝つために、国民は、祖先の魂に時を告げるお寺の鐘さえも、祖先から受け継いだかけがえのない家伝の日本刀さえも、国家の必勝を祈願して供出した。

戦争のときには、日本国民も、ドイツ国民も、ソ連国民も、みな一生懸命に私欲を抑え身を削った。古来、いずこの国民

も、まともな人々はそうであった。

③さらに、祖国の国民文化への忠誠心がある。

祖国の文化に誇りを懐き、それに愛着を感じ、その文化を呼吸し、守っていくことに生甲斐を感じるものがそれである。国旗のユニオンジャックを見て国王・女王陛下への忠誠を誓って奮い立つのがイギリス人であった。かつてアメリカでは、国旗と国歌と英語（米語）とに対して忠誠を誓うことが、移民として受け入れられるための前提条件であった。

外国の地で、祖国の国旗に出合い祖国の国歌を歌うと涙を催すというのは、われわれがしばしば経験する事実ではないか。

この文化というソフトなものへの忠誠心は、自由に放任しておいて育つものではなく、教育によって力を強められ、質を高められるものであるが、元来は自発的なものでありたい。その本来わずかも自発的なものを、教育に励んで深い忠誠心へと育てるのである。祖国の歴史についての教育の根本使命はここにある。

④納税と勤労奉仕も、国家への忠誠の実行である。

国民が国家として生きていくには費用がかかる。世の中、「打出の小槌」は存在しない。国家機関の行動は、公共財を

造って供給することにある。公共財とは、いのち集団を維持するために欠かせないものであって、その財は国民一人一人のいのちを支え豊かにするものである。

しかし、それには費用がかかり、その費用は基本的に、国民から徴収することになる。納税と勤労の義務は、国家への国民の忠誠心を発揮する上での義務である。

だから、税について国民の意識は、高まらねばならない。「取られる」とも考えるのでなく、感謝をもって「納めさせていただく」という自発的、奉仕的な心になるのである。納税が忠誠心の的確な表明となり、納税することがまた各自の忠誠心を向上させ、国民としての生きがいとさらに高める。そして、納めた税を正しく活用するように、管理するのである。納めっ放しでは義務を尽したことはない。

国民が進んで行うボランティアとか信仰対象への献金（お布施）は、生きがいの元となるが、納税とは、本来そういうものなのである。

⑤政治と公共行政への献身、司法・治安への献身も、国家への忠誠心の発露である。

子供たちにとって、将来、自分は立派な政治家となり、あるいは官僚・公務員となって、国家に尽くしたいというような

動機目的は、かけがえのない忠誠心の源泉である。最近のように政治家批判と官僚批判が激しい時代でも、政治家、官僚のすべてが悪者なのではない。そういう官僚や政治家が共に忠誠あふれる公僕として存在しないならば、国家は一歩たりと前に進まないであろう。

度の過ぎた政治批判、官僚批判は、公共世界への優秀な人材の供給を阻害し、亡国へとつながる。

昔は軍部・軍人が嫌われた時期もあったが、今は政治と官僚と財界との関係が批判されるときである。特に官僚だけが公僕であり、「公僕たる官僚」は国民代表である政治家にひたすら従属し、政治家や首長の召使いの如くにその言うことを聞くべきだ、との声大きいが、とんでもない。誤解してはならない。官僚も国民と市民との公僕であるが、政治家もまた公僕なのであり、いずれも公僕として主人たる国家・国民の「公僕」「召使い」(サーバント)なのであり、国民の意志を聞くべきなのである。政治家が官僚(公務員)に汚い口を聞き、威張る筋合いはない。

政治家の中には、インタビュウを受けて合槌を打つとき、謙虚に「はい、はい」と言うべきなのに、「ウン、ウン」とか「あー、あー」などといって答えるような者がいるが、傲慢の

心が溢れているではないか。

国会は国権の最高機関だということの意味は、議員が官僚より上位にあり、議員が横暴であつてよい、ということでは断じてない。政治家は、公務員だけに公僕性を要求するのではなく、自己自身もまた国民に対する公僕であることを忘れるべきでない。

ある女性政治家・外務大臣は、相当厳しく外交担当省内の「ウミ」を出すことに尽力し、ある程度成功もされたが、密入国を図った某国の重要人物の扱いや、同国による日本人の拉致問題では、担当大臣として不作為が目立った。ご父君の猛勉強ぶりに習って、政治をもっと勉強して欲しかった。公務員を委員会という公然たる人前で「口汚く叱りとばす」のみでなく、公務員の扱い方にもっと知恵を発揮し、成熟した大人として風格ある行動を示して欲しかった。

大政治家たりしご父君の遺徳を汚してはならなかった。多分、大舞台に急に登壇したので、上気しておられたのであるが、今からでも遅くはない、青史に名を遺す人物へと向上して頂きたいものである。日本には偉大なる女性政治家の先例が欲しいのであるから。

私は、一九八〇年代の初めにロンドンに留学していたが、その際、ビッグ・ベン目当てに、世界に冠たる大英帝国の国会を見学に行った。そこで驚いたことは、議員諸氏は紳士淑女であらうことか、その言動の汚いこと、はしたないこと、お行儀の悪いこと、あきれるばかりであった。

公僕たる大臣が、公僕である官僚を人前で口汚く罵るといふほどの場面は見掛けなかったけれども、議員同士の間でやり取りされる言葉は、私の英語力の範囲に無いような言葉が多く、初めはなかなか理解できない程のものであった。

さすが、大帝国を築き上げた国の国会議員というものは、賓客を迎える公式パーティーでのお上品な言葉とともに、相手に生卵を投げつける時の罵り言葉まで、幅広く豊かな表現を身につけている。それが教養として必要なのだな、と感銘(かんとく)したものであった。

考えてみると、政治とは別の形での戦いなのであるから、それでよいのだろう。有能なリーダーは、お人形ではない。

国民一人ひとりには、能力に応じて政治家や官僚という公僕になり、国民全体の福利のために献身するのであって、そのことが生甲斐となるのである。さらに徹底していうならば、国民各自が、国家という公に對する奉仕者として、公僕なのである。

こうした点を配慮するのが、国家として善い歴史を創ることにつながるのではないか。

⑥ 国家への忠誠心は、各自の職業と、ボランティア領域との、双方で発揮される。

国家への忠誠とは、何も右の公共の仕事(公務)に尽くすことばかりではない。その前に、われわれが自分の持ち前である仕事を固め、そこで力を尽くし成果を上げるならば、それを通じて他の国民同朋の福祉を高めることにつながる。働くとは「傍を楽にすることである」という考えが日本にもあるが、これは万国に通じる真理ではないか。

近頃、流行のボランティアも、やはり同じく傍を楽にするものであり、国民同胞の福祉を向上させる貴重な奉仕活動である。ところが、本来、NPOやNGOなどのボランティアは、「報酬をもらわない無償の奉仕」という意味で、営利性、報酬つきの仕事とは違う筈だが、政府や自治体の下請け活動に変質したものが多し。一体、どうしたことか。行政が化けたのか。それはともかく、立派な教育を受けて自分が人間としての天分を伸ばすことは、やがて公的の仕事やボランティアに自分の才能を活用する準備といえるであろう。

二 自己責任と国家責任の関係

——もうひとつの思考実験——

二〇〇三年に始まったイラク戦争は、善意で平和ボケの日本人に、次々とノックピキならない問題を突き付けてきた。少なくとも私自身には、その種の問題を考えさせてくれる。その一つは、二〇〇四年三月にイラクの国内において発生した三人の日本人の人質事件である。他方、二人の人質事件の方はあまり騒がれずにお仕舞いになった。それはそれで良かった。今もって肝腎な問いを投げかけたのは、三人の方である。

何が問題かという点、それは「国民としての個人」の自己責任と、その国民からなる国家の「自己」責任との関係はどうか、ということである。

まず、われわれは、多くの要因の中で、最小限必要な利害関係者（ステイクホルダー）の構図——因と縁と果の関係——の確認から始めねばならない。利害関係者の構図は、次の通りである。

①人質にされた三人の個人

日本国民としての個人が三人ということであり、三人とも他国の国民ではなく、日本の政府が発行したパスポートを所持し

ていた日本国民である。

②日本国

国会の決議に基づいて、イラク国内に、復興人道支援のため自衛隊を派遣した。その目的もこれまでの行動も、人道支援のためであるということで、イラク人を一人も武力攻撃してはいない。

③日本国家による自衛隊派遣

従来 of 国連決議を踏まえつつも、日米同盟のあるがゆえに派遣したものである。その限りでは、イラク人のうち反対グループから「日本は、排除すべきアメリカ占領軍と同じく、敵に該当する存在である」と見られている。したがって、捕獲された三人は、イラク側から敵国日本の国民であると見られ、日本政府はそういう敵性国の政府であるという。

④イラク側

まず、直接三人を人質として確保した犯行グループがいる。その背後に部族社会があるらしい。また、イラクにはイスラム聖職者協会という組織があり、犯人グループとコンタクトがあるらしい。

⑤ アメリカ

軍隊を派遣し、占領政策——遺憾なことに、多くの拙速と不手際と若干の違法性が目立つ——を実行している。

こうした構図の中で、イラクでの人質問題と自己責任論を位置づければ、次のようにいうことができるのではないか。

① 現代社会の公理

個人責任（個人義務）——自分の身は自分で守る——は、民主主義国家では、いつでもどこでも貫徹することを大前提とする。これは現代社会の自明の公理といってもよい。

個人責任とは、各個人に天賦自然の人権があるのに応じて、その天賦自然の権利を、各人が最大限慎重な注意と努力と工夫を凝らして、正当な方法でもって、実現するよう努力することである。

② 応答責任

元来、責任とは応答すること（レスポンス、レスポンスビリティ、responsibility）であり、天地神仏あるいは人類社会、国家社会からの期待に、応答すること、応答する義務（duty）のことである。

権利には三つの意味があり、まず天地の恵みを指し、またそ

れを獲得する資格、もしくは力のことである。そして権利は、それを正当に実現する努力——恵みを正しく識別し、資格を得、力を培養すること——をしなければ、権利は潜在的に与えられていても実現はしない。われわれは、生きながらにして大気を呼吸する権利を有するが、タバコを吸ったりしてはその権利は実現しないことになる。

個人主義に立つ自由主義を前提とすれば、各個人はいついかなるときにも、いかなることに關しても、最終的に自分の生命と財産を守る権利を有し、かつ責任・義務を負うのである。

③ 共同体の中の相互扶助存在

しかし、いくら個人主義、自由主義、民主主義といっても、それは頭の中で作り上げた観念であり、各人はその観念通りに一人孤立して生きられるものではない。現実には、家族、友人、地域社会、学校、職場、国家、世界というあらゆる階層と範囲の人間関係——共同体——の中で相互扶助に支えられて、はじめて生きる。個人はこの意味での「関係的存在」といえる。

ゆえに、生きる上での個人の権利も義務も、現実にはこうした人間関係と相互扶助に支えられて在る。

日本国民のパスポート

日本国民である本旅券の所持人を通路故障なく旅行させ、かつ、同人に必要な保護扶助を与えられるよう、関係の諸官に要請する

日本国外務大臣

The Minister for Foreign Affairs of Japan requests all those whom it may concern to allow bearer, a Japanese national, to pass freely and without hindrance and, in case of need, to afford him or her every possible aid and protection.

④ 外国での自己責任
 各々個人は、相手先が受け入れてくれるなら、国境を越えて地球上、どこに行つて生きることも自由であるが、その場合自分の生命財産は、自己責任で守るといことが根本公理である。他人が付いて廻つて護衛してはくれない。自分の生命と財

産は誰より自分で守るほかない。

いくら国家といえども、警察官を派遣して個人個人を二十四時間護衛してはくれない。国家つまり国民全体には、そういう個別の義務はない。

ただし、どこでも国家は、国内では警察と軍隊を備えて、治安と国防という形で国民の生命財産を守るとい一般公共的サービスを義務として担当する。

個人としての国民は、国家にそういう一般的義務を履行してもらつて権利を持つ。国民は、納税の義務などを通じ、国家が保護の義務を受け持つことを求める権利を有する。

⑤ 海外での国民の義務

個人は、外国で日本政府発行のパスポートを所持している限り、日本国は政府という行政機関を通じて——場合により司法府も立法府もこぞつて——日本国民である本人の生命財産を保護してくれるよう、滞在先の外国に、日本国家としてお願いする。

日本国民のパスポートには、パスポートを所持する本人を安全に通ずるよう保護して欲しいという意味の言葉が外務大臣名前で書き込んである。国家には、そういう自国民保護の責任があり義務がある。

それゆえ、二〇〇二、三年以来、イラクの土地で——その土地の政府が崩壊して不完全国家の状態であるとはいえ——生命財産を守る義務は、まず第一に、日本人としてその地に入る本人個人にある。同時に、日本国政府にもいざという時にはその人を守る義務があることになる。国家の受け持つべき国民保護の義務は、小さくはないのである。この意味で国家（国民の集まり、及び立法、司法、行政という国家機関）と国民とは、一体なのである。

⑥ 国家の義務の条件と範囲

とはいえ、そのとき、国家の義務は、その個人が国民として期待される義務を果たしている限りで生じる。つまり、日本国が批准した国際法を国民個人として守り、日本国の法を守り、滞在先の法を守り、倫理的、慣習的にその外国としての正当な行為をすることである。

その個人が国民としての義務を放棄している場合には、保護しようがない。国家の義務・責任は万能かつ無制限ではないのである。

引き連れていく多くの羊を待たせて置いて、一匹の迷える羊を探しに行くという「迷える羊」の物語が『聖書』にあるが、その場合、他の多くの羊が皆どこかへ行つて失われては、元も

子もない。話には、この前提条件があるのである。感動物語は、冷静に受け止めるべき話なのである。

⑦ 外部要因（縁）

人質になった三人には、米国軍によるイラク攻撃と、それへのイラク人の反発、抗議行動という三つの外在条件が縁として加わり、本人たちが意図せず左右できない要因が作用した。

また、日米同盟の関係もあって、日本が国会決議によってイラクへ自衛隊を派遣し、その派遣がイラクの反米グループから見れば不当な米国加担と映ったこともあり、三人の日本人が敵対国の国民だと理解されたことも加わった。

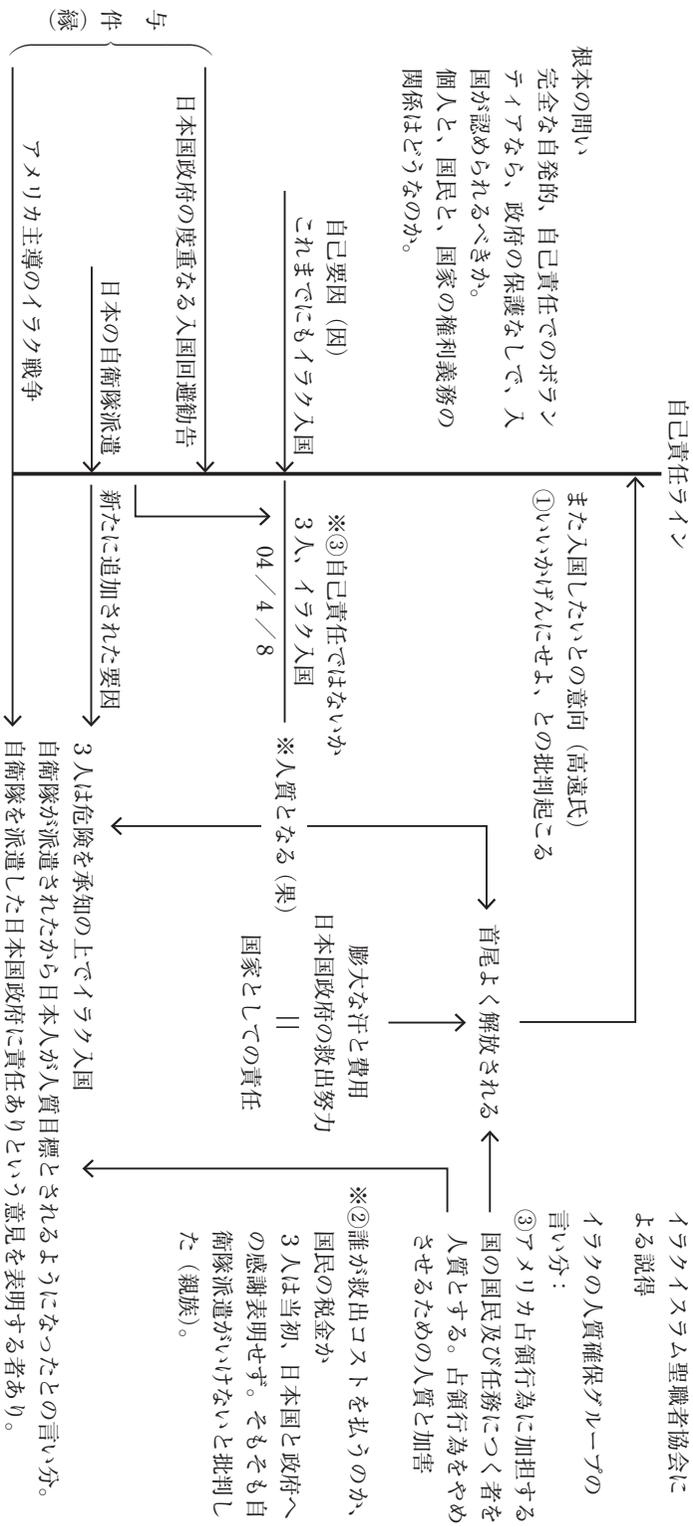
⑧ 総合判断

整理すると、各人にはあくまでも個人責任がある。しかし、個人の責任を履行する能力には限界があり、国家に頼らざるを得ない局面がある。また、個人たちの左右できない米軍の行動と日本の自衛隊派遣とイラク側の反米抗議行動という三つの客観要因が重なる。これはそれと知って事前に頭の中に入れて行動する責任が個人たちにある。

それを怠って危険な目に合うのでは、国家は——最大限努力はするもの——救いようがないだろう。ただし、救出のために政府にかかった費用を個人たちに負担させるかどうかは、こ

個人・国民と国家の権利と責任の問題 —レベルの異なる価値の関係づけ—

2004年4月のイラク人質問題



歴史は、永遠のいのちを目指す

※④自衛隊派遣と3人の自発的イラク入国とを混同すべからず、との批判起こる。
 ※⑤そもそも大義なき戦争を始めたアメリカにこそ根本責任がある、との意見あり。
 ※⑥かつ、大義なき戦争に加担した日本国と政府に責任がある、日米安保に問題あり、と。
 これまでも、多国籍企業に
 において同様の事件多発

れは国家と国民の度量次第であろう。

⑨ 動機目的、方法、及び結果についての倫理責任

個人責任を力説することは、現代社会の公理であり、その上で、国家は国民の生命財産を、事情のいかんを問わず、可能な限り保護しなければならない義務を有する。

なお、例によって外国のメディアが、「ボランテアという崇高な目的の行為を日本の政府も世論も十分に評価せず、個人責任論から三人を批判する」と論評したというので、日本のマスコミ等から、すぐにその尻馬に乗った上で、「三人の行動に自己責任を求めるのは筋違いだ」との後追いの論が出たが、それは全くおかしい。

やはり行為の動機目的がいくら崇高であるとしても、行為する者は、行為の方法も慎重に工夫する責任を問われるのである。むしろ、結果についても責任を問われる。崇高な動機目的に導かれるボランテア行為だから個人責任を免れるという筋の公理は、人類社会には全く存在しない。われわれは、すべての自発的行為に自己責任があるのである。

二〇〇四年春に起こったイラクでの日本人人質問題は、異文化との接触局面で、歴史を作る上での教訓と指針を与えてくれた。人質事件には意味があった。

三人の諸君、あなた方の体験は、われわれ日本の同朋すべてにとってのかけがえない宝です。真にご苦労さまでした。

三 戦争は国境を越えて人間愛を生むのか

ところが、以上のような国家への忠誠心も、グローバル化とともに変質してきているのではないかと考える。皆さんはいかが判断されますか。忠誠心がどのように変わるのか、纏めて展望してみよう。

まず、忠誠心には、何か一般的な基本原理のようなものがあるだろうか。確かに、歴史を学べば、それらしきものがあることが分かると思う。それは、隣人愛であり、また隣物愛である。人類は各々、身近に接する人や物に愛着を感じ、自分の心身の触れ合うものを大事にするように成っているらしい。

イエスは、「私は家族の中の（にとどまる）愛を打ち破るために訪れた」といった。それは、隣人愛の教えである。狭い血縁の絆だけに囚われた利己心を乗り越えねばならないと教えた。そのイエスでさえ、山上の垂訓において、「モーゼの十誡」を受け継ぎ、人間の自然の心情に基づいて、隣人愛一般より区別して、特別に、「父母を敬いなさい」ということを教えた。

実は、父母祖先こそはわれわれ各人にとって切っても切れない終始第一の隣人なのであって、道端で出会う人が第一の隣人なのではない。ここに隣人愛の出発点がある。これは忘れてはならぬ事実なのである。「孝は百行の本」と東アジア大陸の古人は述べたが、まこと真理である。

この点を誤解すると、隣人愛といいながら、第一の不可分の隣人である親祖先を尊敬もせず、粗略に扱ひ、家族を軽視する反人類的な人物となる。それゆえ、イエスは、遠い他人を敬えとか、縁遠い人を愛せよ、と無理に教えはしなかった。最も身近に出会う人を進んで隣人と成し、愛しなさい、と教えたのである。

人間には人間の性質というものがある。人は、親戚縁者という血縁の近い者を基礎とし、次いで自分の前に現れる人々、そして「遠くの親戚より近所の他人」というように、手を広げ声を出せば届く距離内にいる人々をこそ、大事にすることができ。それは、われわれが毎日、そういう人々との間で、いのちの相互作用を濃密に交換し、いのちを支え合うからではないか。忠誠心は、隣人に対してこそ最も必要であり親しく發揮されよう。

各人は自己への忠誠心を持つが、お互いが友人となるなら

ば、その自己への忠誠心が、相手に対して働き、「友情」というものになって表わされるのである。友情とは、相手の自己愛を一部分こちらが共有し、支えることである。

戦友は、しばしば兄弟姉妹よりも親密であるといわれる。

同じ学び舎で勉学と生活をともにした者や、スポーツで苦楽を共にした者同士もそれに似ているが、戦友というものは、それより遥かに親密のようだ。戦争に行つたことのない私には分からぬが、いのちを懸けて戦うということがその日常生活であり、いのちを懸けて扶助し合うという体験を共有するからではないか。

日本国民は、戦争が終わって五十年、二〇〇〇年を回って、若い時にそういう親密体験をした世代が、世を去っていく段階を迎えている。国民の間に「いのちをかけた親密体験」がなくなると、国民の団結はどうなるのだろうか。

むろん、戦友という戦場での共同体は視野が狭いし、友情といても「敵国への敵愾心を前提にした友情」に過ぎない。しかし、本当の人格者は、戦い終わってから、相手をもはや敵とは思わず、友として遇するという。

その例は、敗れた日本に対して礼をもって遇したイギリスの

マウントバツテン卿（一九〇〇〜一九七九）と、終戦時の中華民国の蒋介石総統（二八八七〜一九七五）であろうか。卿は日本の敗軍の将を紳士として手厚く処し、総統は「恨みに報いるに徳をもつてする」といわれた。

それに反し、ソ連の指導者スターリンは、一九四五年、日ソ不可侵条約を破って満州国に攻め込み、ソ連軍兵士たちは残虐の限りを尽くし、あまつさえ膨大な数の日本人をシベリアの寒冷地に抑留する、という歴史的裏切りと蛮行を行った。その死後、日本国民の間で今もって悪名高い。

ところで、古今東西、戦争では敵方と味方とに分かれて戦い、終わって後日、何かの拍子に出会い、深い友情で結ばれるという話は、決して少なくない。

山口宗敏『父・山口多聞』（光人社）にも、そうした数奇な友情の実録が書かれている。大東亜戦争・太平洋戦争において——日中戦争では聞かないが、恐らくいくつも例があったであろう——日本とアメリカの運命を分けた真珠湾攻撃と、ミッドウェー海戦とで、敵味方として二度相まみえた兵士たち間の奇遇と友情の物語である。長くなるが、貴重な記録なので引用し、皆さんにご紹介させて頂きたい。

日本側の兵士とは、一九四一年十二月八日のハワイ真珠湾攻

撃に参加し、大勝利した日本海軍の若武者、萬代久男（当時二十歳）、橋本忠（当時十九歳）のご兩人。ともに海軍。

アメリカ側はコンラッド・フリーズ氏（当時十九歳）。その頃、真珠湾の近くのカネオへ基地に勤務していたが、真珠湾より一〇分ほど早く日本軍からの攻撃を受けた。折悪しく哨戒機の油が抜いてあって飛び立てず、仕方がないからその飛べない哨戒機に乗り込み、攻撃してくる日本爆撃機の銃撃の中で、地上から機銃によって反撃を続けたという。

運命とは皮肉なもの。ほどなく六カ月後に、日本側の兩人はミッドウェー海戦（一九四二年）で空母飛龍の乗組員に加わる。しかし、アメリカ海軍の総攻撃を浴びて、飛龍はあえなく沈没する。兵士たちは海に逃れて十四日間も漂流し、食糧も水も尽き果て、まさに命脈終らんとするとき、何とフリーズ氏の乗るアメリカ軍の哨戒機に発見される。

フリーズ氏も、アメリカ海軍の操縦士としてミッドウェー海戦に参加していたのである。ボートで漂流していた日本側の乗組員たちは、フリーズ氏の哨戒機に発見され、米軍に救助される。

萬代氏は、戦後、海上自衛隊の幹部学校教育部長になっておられたが、飛龍での体験がある時アメリカの本に載り、それを

ボーイング社に勤めていたフリーズ氏が目に留め、二人の間で文通が始まる。そのことが機縁となり、かつて若い頃、敵味方に分かれ対立して戦った日米の兵士が東京で再会する。フリーズ氏は、元軍人として、まず、靖国神社に参詣を希望したそうだ。こういう次第で、萬代氏の部下であった橋本氏もフリーズ氏と出会うことになる。

波間に漂流していたボート上の日本兵の姿を発見した時のことを、思い出して語るフリーズ氏。

二週間後の昼ごろ、日本の旗をつけた小さなボートを見つけました。私は死傷者四千人に近い被害を受けた真珠湾の復讐心に燃え、ついに仇を取るチャンスがきたと興奮していました。機関銃に弾を詰め狙いを定めました。一発でも撃ってきたら、一撃で沈める自信がありました。

しかし、銃の照準鏡から見えたボートには日本兵はいませんでした。そこに見えたのは漂流者であり、全くの無防備で、弱り果てた敗残兵の姿でした。私にはとても引き金を引くことができませんでした。

救助艇を派遣してくれるよう無線で連絡を取ったのです。あのとき軍艦旗が降ろされ、あなたたちから発砲され

なかつたことが幸いでした。もしも皆さんを殺したら、私は生涯、心安んじて生きて来られなかつたでしょう。神様に守られ、皆さんの救助に役立てたことを感謝します。友として、今日、再会できて本当に嬉しいです。

ハワイで私が助かつたのも、全能の神のお陰でした。私があなたがたを撃てなかつたのも、あなたがたの上に神様が居られたからです。

私たちが生き残つたのは、神様が居られたからです。その神様を証するために、私は生かされて居る、なすべきことがあるんだと、毎日祈る度にそう思います。あの火の中をくぐり、神様に生かして頂いた私たちの戦争体験を、後代に語り継ぐこともその一つです。

(以上、一一六～一二二ページより。改行、ルビ追加。)

これは真に美しい事実であり、かつ物語である。しかし、再会どころか、殺し合つて斃れ、恨みを懐いたまま声も発することができず、果てて草むらの土となり、海の藻屑として沈んだ人々も数多いだろう。

ジョン・F・ケネディは述べた、

人生は不公平である。ある人は戦争に出征して帰らぬ人と

なる。

帰るには帰るが傷ついて来る人もいる。

戦争に行かない人もある、と。

そもそも、死力を尽くし、殺し合いを行った後からでない
と、人類は友情を育てられないのか。嵐の後にこそ、日和の味
わいは高まるというわけか。それならば、なぜ人類の感情はそ
のように歪んで居るのか。

- ① 敵を作って攻撃し、味方を団結させ守らせるのは、神仏の御心か、摂理か、はたまたお戯れか。
- ② 兵士として戦い、いのちを奪い合うのも、神仏のお定めか。否、悪魔の仕業なるか。
- ③ 銃の引き金を引かせないのも、神仏のお慈悲か。
- ④ 戦争に突入させ、国を守らせるとは、一体、神仏のどういうお計らいか。
- ⑤ 一方に勝利の甘美を恵み、他方に敗北の苦渋を嘗めさせるのも、神仏のご采配か。
- ⑥ 人類は、なぜ敵と味方とに分かれ戦争までしなくてはならぬのか。神仏のお好みか。
- ⑦ 神仏とは、一体、何なのか。
- ⑧ 神仏など、果たして存在するのか。

⑨ 神仏の性質というものを、人類は勝手に解釈して居るのではないか。そもそもそれは、人智によって理解し尽くせるものなのか。

なぜ神仏は、初めから、戦などしないようにと、人間の性質を素直なものに創造なさらなかったのか。リンゴの実を食べたという、人類の二人の祖先、アダムとイヴの原罪の故にか。

人類は気づかぬが、どこかもっと大きな広い世界が存在し、戦などこの世のことはそれへと到る序曲であるのか。その広い世界に到れば、この世での勝ち負けなどは、些細な事柄に過ぎない、と位置づけられるのか。

戦争の歴史は、われわれ人類をして、深い謎の前に立たせる。……

ちなみに、戦争の意味を考えて見るには、例えば、上山春平『大東亜戦争の遺産』（中央公論社）などを参照。かの有名な林房雄（本名、後藤寿夫）著『大東亜戦争肯定論』が新しい装いを得て、夏目書房より再刊された。林氏の観点は、欧米と日本とは明治維新より前から、一九四五年までの間の「百年戦争」において、戦い合うべしという宿命におかれていた、というにある。戦争観の重大要素である。

どうも私には、神仏のことはよく分らないけれども、こういうときには、ミクロ（微視）とマクロ（巨視）の歴史論というものを分けて考えるべきではないか、と思う。

国と国との間の歴史対話には、混同してはならず慎重に區別すべき事柄が存在するのではないかと。ミクロの出来事とマクロの出来事との関係がそれなのである。

われわれは、この二つの異なる種類の事柄を明確に区別し、次に関連づけて、評価するようにしなければならぬ、と思う。この手続きを省くならば、国と国との間の歴史対話は混乱する外ない。

例えば、戦場でA国とB国とが敵と味方に別れて戦う。それがA国がB国を不当に侵略する場合とする。その時の戦場の一隅において、殺し合った者同士が、戦い済んで後、再会して友達となる。あるいは、一方が捕虜となり、他方がその者を人間として労り丁寧にもてなす。戦争が終わって後、友人として付き合いを始める。

これは否定できない身近なミクロの事実であるが、十分に起こり得る可能性がある。こうした、戦時における、そして戦後における、友情物語は決して見逃してはならない。

あるいは、A国は戦いに敗れはしたが、A国には戦闘で殺し

た敵B国の兵士の靈魂を手厚く祭祀するという文化があり、それに基づいてA国の元兵士が敵国の戦死者の靈魂を祭祀。もちろん、世界には、敵の魂を祭るなど論外である、という人もあり文化もあるだろう。

日本は、蒙古兵の魂を祭祀した。

いわゆる南京大虐殺の指揮者として東京裁判で処刑された松井巖根大将の場合は、まさにこの事例である。松井大将は、南京で死傷した中国人の靈魂を祭る観音様を建立し、日に申つたという。これは無視できない確たる事実である。立派な事実である。しかしミクロの事柄である。

だが、ミクロとマクロは異なる。大東亜戦争の場合に限らない。欧米各国の場合でも、かつてナポレオンがドイツに攻め込んだとか、近くはドイツがフランスやポーランドに攻め込んだというようなマクロの事実は、こうしたミクロの事実によっても消え去るものではない。ミクロの美談に注目する人々は、往々にして、このマクロの事実問題を無視するか、場合によれば認めたくないという態度を見せることもある。

逆に、マクロの侵略か否かというほうに注目した人々には、些かのミクロの美談などには目も呉れない、という傾向が強く出る。そんな美談など、公害に汚れきった大河の流れに一滴か

二滴の蒸留水を加える程度のもの、と。

もちろん、マクロを疎かにしてはならない。南京大虐殺

が、極東軍事裁判と中華民国——当時は当事国。北京政府の中華人民共和国は未登場——の主張するように、そしてそれを受け継ぐ共産党の北京政府が今日まで主張するが、しかし本当に行われた事実なのかどうかは、マクロの重大問題であり、科学的に、あるいは非科学的に、未だ論争中である。この論争は、南京という一つの都市での、ミクロというよりマクロの事実に関する真偽の論争なのである。

南京大虐殺ありき、をはじめから主張する立場——真実のみではなく、心でそう決めつける心実を有する——の人々は、松井大将の行ったようなミクロの行為などは往々にして無視する。ミクロの事柄を無視しながら、マクロ的には、南京大虐殺の存在だけを決定的な事実として主張する。

いずれの立場に拠るにせよ、意味づけの上からいって、これはミクロ問題ではなく、マクロの事柄に関する「あったかかったか」という存在問題である。

歴史論争では、そこに政治的意図を込めた心実が重ねられるから、論争はむつかしくなる。

アメリカが広島と長崎に原爆を落とすし、東京をはじめ全国で九十カ所に及ぶ都市に空爆を加え、膨大な非戦闘員・一般市民を殺傷したのは、マクロの出来事である。

しかし、広島島の焼け跡に進駐軍の兵士が休暇を利用して一人、二人とやって来て、自分たちへの放射能の危険も顧みず、火傷に苦しむ人々を気の毒に思っ、手厚く治療し、その後、太平洋を跨いで、少数とはいえ当事者の間に友情が交わされたとすれば、それは立派な行為である。しかし、ミクロの出来事であり、ミクロの心実問題である。

では、神仏ならぬわれわれ人類としては、ミクロとマクロの不一致の問題はどうすればよいのか。結局、こうしたミクロの美しい事実と物語がどんどん増えて、戦争による悲惨を拭い去るほどになれば、ミクロとマクロとはほぼ一致するようになる。

そうなれば、戦争を行うという渦中において、戦争のマイナス価値が解消することになるであろう。しかし、悲しいことに、全体としては、決してそうは行かないというのが、人類の歴史上の戦争というものである。

マクロだけで歴史を判断しても、歴史の事実を捉え切ることにはなるまい。反対に、ミクロだけで歴史を埋めつくすこともできまい。どうすれば、双方の橋渡しはできるか。

争いの渦中かたしゅうにあるとき、個々の人間としては、マクロの——
 個々人にはどうしようもない——流れの中で、常に「一隅いちごうを照
 らす」という心になって、

「出来る限り敵をも愛す」

「実は敵はどこにもいないのだ」

という精神で行動する習慣をつけるほかないであろう。

ある人は、戦場において、「敵に銃口じゅうこうを向けて引き金を引
 く」とときには、「どうか相手が救われますように」と祈りながら
 引いたと述べている。せめて「戦争」という定めさだの中で、それ
 が一人ひとりに許された小さな範囲での自由選択なのだろうか。

そして、幸いにも、戦い終わった暁あかつきには、

「敵はどこにもいない」

という精神になり、マクロの川の流れを理解しながら、ミクロ
 の美談にも十分注目する。こうした歴史認識を持ちたいもので
 ある。いつまでも「鬼畜米英きちくべいえい」といったマクロの敵愾心てきがいしんを燃え
 滾たぎらせ、ミクロの美行を無視する生き方は、淋さびしい、貧まずしい、
 悲かなしい人生へとつながろう。

どちらの歴史認識が、人類世界を平和にし、個人の人生を味
 わい深くするか。一人ひとりの心の選択に懸かかっているのでは
 ないか。

四 グローバル時代、忠誠心の構造が変わる

それゆえ、われわれは相利共生さうりきょうせい——共に利を与え合う——
 の方法として、交易こうえきにおける相互扶助を發展させ、そこでの忠
 誠心を身につけねばならぬ。これは、生活を支えるために行う
 交易相手への忠誠心であり、また一般原理としての公平性こうへいせい
 (フェアネス)への忠誠心である。「お客様は神様です」といっ
 のは、このレベルでの忠誠心である。市民的忠誠心といっても
 よいだろう。

国家はそういう市民的忠誠心を支えるルールを作り、行政を
 行う。商品のごまかしなどが起きると、国家の監督かんとくの不足に対
 して、国民の批判の声が挙あがるのはそのためだ。

国家が市場での交易をよく監督し、国民がよくルールを守っ
 ていれば、国民は国家がそのように働いていることを忘れる
 が、実は忘れて済ませるときこそ、国家は良好りょうこうに働いている
 のである。われわれは、地球上に住んでいても、重力が一時た
 りとも手を抜かず身体に働いている、ということを感じない。
 しかし、石に躓つまずいて転ぶと、その事実を思い知らされる。感じ
 ないときの方が、かえってよいのだ。転んでいないから。

大陸の『詩経』という古典に曰く、

「日出でて作し、井を穿ちて水を飲む。帝力、我において何をかあらんや。」

帝力とは、皇帝の政治の働きであり、国家の働きのことである。これであつてこそ、実は国民は、国家の働きを強制されるものと思わない、強制が極少となり、かつ服従が自発性による服従となっている。これこそ忠誠の理想の状態だ、といえるであろう。

忠誠心というものには、高底と広狭の幅がある。

最高度においては、ごく稀にはあるが、自分のいのちを捧げることであり、ごくありふれた程度においては、自分の仕事の成果を提供することや、あるいはボランティア活動を捧げることである。

広がりにおいては、グローバル時代における忠誠心の構造は、国家をも越えていく。つまり、利益（りやく）と愛着の拡大に対応して、忠誠心は組み変えられるようになる。それは、善財（goods）の広がりに応じて決まるのである。ここでは国家を包みながら国家を踏え出る歴史動向を見ておこう。

① 祖国と他国との協定の範囲内での忠誠心

これは、集団的な防衛・集団安全保障という場合に最もはっきりと現れる。現代の国防では、一方では核兵器の発展によ

り、他方ではテロ戦争の拡散によって、一国主義に立つ個別的自衛（権）はあまり有効でなくなり、集団自衛（権）が妥当な方式となってきた。

国防では、「自分たちがいのちを懸けて守る」という祖国への忠誠を基礎としながら、その上に他国と協力して相互扶助的な忠誠心を培養しなければならぬ。同盟条約に沿って、他国の国民もこちらがいのちを懸けて守ってさしあげる、という忠誠心である。同盟国同士の相互的な支援は忠誠の証であり、国家単位での隣人愛の発露である。

② 国境を越えた国際的な交易での忠誠心

こうした国内での国民的忠誠心は、市場での売り買いを通じて、おそらく地球世界の全体に及ぶ。となると、食糧の生産と供給について、

「日本のお百姓さん、ありがとう」

というのが、これまでの国家の枠内での愛着であったが、

「世界のお百姓さん、ありがとう」

というところまで、感謝と愛着は拡大すべきである。

食べ物だけではない。日頃乗り回す自家用車は、トヨタとかGMとかベンツなどと、特定のメーカーの名前は付いているが、技術と部品は世界中の会社や工場から供給され組み合わせ

れる。だから、感謝の表現は、

「世界のお百姓さん、技術者や労働者、商人のみなさん、
ありがとうございます」

ということになる。グローバル時代にさきがけて、この点をい
ち早く力説したのが、かの大前研一氏であった（『世界が見え
る日本が見える』『新・国富論』、ともに講談社）。

これは、私的な善をもって相互に交流し合う相互的な忠誠で
あり、ひいては国境を自由に踰えて——居住と移動の自由は問
題——忠誠心がグローバルに通い合う。これは、未だ南北諸国
間の対立があつてしつくり行かないが、WTOのような世界共
通の取引ルールと、そこに込められた共通価値への忠誠心なの
である。

③世界に開かれた次元で結び合う忠誠心

これは、文化活動の場合によく現れる。まず、何より祖国の
内部文化への忠誠心が土台となり、次に接する範囲で外国文化
の尊重という意味の忠誠心が働く。この文化への忠誠心は、
著作権の相互尊重などに見られる。

また、科学の研究成果は世界中に公開されるが、それを応用
した技術も、相当広く相互扶助的な関係を築く。特許やノウハウ

ウの形で利用上の限定はあるとしてもである。この場合、科学
では世界に普遍的な真理というものに対する忠誠心が現れ、技
術では利用するもの同士の相互的な忠誠心が求められる。いず
れも、国境の枠に囚われない全人類的な忠誠心である。

昔から各国で、そして今日特に中国で、物真似（コピー）商
品が発売されるが、それは忠誠心の侵害である。しかしそれ
も、やがて消えて行くであろう。

④宇宙と地球生態系への忠誠心

もう一段と考えを広げ深めれば、人類は宇宙と地球生態系と
に包まれて生きているのであるから、宇宙と地球生態系に対す
る忠誠心を構築しなければならないことが分かる。

宗教が説いて来たように、宇宙を神仏とのかかわりにおいて
聖なるものと理解すれば、神仏に対する忠誠・信頼・仁愛・慈
悲が、忠誠心ということになる。

この考えでは、一切万物は神仏の現れであり、神仏の心が
通っているのであり、したがって一切万物を尊重することが忠
誠心を証明することになる。だから、ご飯粒でも「もったいな
い」という。世界宗教的な神仏への忠誠心は、いずれの国家に
も通じ合うとともに、同時にいずれの国家にも縛られない全地
球的、全人類的でグローバルな忠誠心である。

古来、宗教ごとに「世界宗教」は、神や仏や天などの考えをもって、このレベルの忠誠心をわれわれ人間に説いてきた。「神のために」、「仏のために」、「天命にしたがって」等々の表現で示される。これは、全人類を対象とし、国家や民族の枠にとらわれぬ——「反する」のではない——形で、忠誠心を培養するものである。

グローバル時代というものは、「誰もが隣人となる」ということであって、そういう国家を踰える地球公共的な善と、それを担う財が拡大し発展している時代なのであり、それに応じて忠誠心も——身の周りから遠いだけ薄くはなるが——地球的な範囲にまで拡大しつつあるといえよう。

人類の歴史は、国家を形成しそれを保存しながらも変質させ、それとともに人間の生存発達のための心のガイドラインである忠誠心の方向と目的を、新たに構築し直す。この動きを方向づけるのは、公共的な善と財の構造である。

まず、国家の範囲での公共的な善財がある。国土とその防衛をはじめ、言葉などの祖国の歴史、文化、価値がある。それは個人としても、家族としても、いのちを支えるために不可欠である。その意味で、国家への忠誠心は不可欠であって、決してなくなりほしくないものである。

自分や隣人が落としたごみを、遠いところに住む外国人は来て拾っては呉れない。ここでも、近きから遠きへという隣人愛の原理の働き方が思い起されるべきである。

むしろ、国家への忠誠心を固め、それを通じてこそ、地球的忠誠心を構築できるといえるのではないか。

何度も言及したが、伝教大師、最澄（七六七〜八二二）の言葉にいう、「一隅を照らす」と。この名言には、このような意味が含まれていたのではないだろうか。

われわれ日本人は、ここまで考えて来て、日本国家として、日本国民として、極めて重要な問題に、もう一度考察を加えておかねばならない。それは天皇の問題である。

先には私は、天皇も国民もともに一体的精神となつて、宇宙の靈力に祈り、宇宙の靈力につながり、宇宙の靈力を頂き、同時にそれと呼应して宇宙の靈力を国民一人ひとりが自らの人間の力のうちにおいて開発し、偉大な生命力を発揮して行くということを示した。

それは、繰り返し述べた通り、「万邦無比」といつても、日本だけが世界一のすばらしい国であるとうぬぼれることでは決してなかった。

日本の天皇と国民は、地球上における日本という国家の領域

において、日本国民たる人間集団が、天皇という存在を通じて——天皇と一体として——国民的忠誠心を發揮させる働きを実行してきた。今やその働きを日本という国家内において実行するとともに、さらに宇宙的、地球的な忠誠心へとつながり、それと国民的忠誠心を一貫させる働きを実行するのである。

グローバル時代において、日本の天皇と日本国民の忠誠心は、気付かぬままでもなく、自覚して、この次元にまで高められねばならないのである。

大正から昭和にかけて、大東亜戦争に至る段階の日本の国体論・国家論・天皇論では、日本の天皇と日本国民の忠誠心が、未だ日本国家の範囲内に止まっていた。

しかも、国体論を唱える運動者たちのうちにも二種類あって、人格高潔でないままに、極めて感情的、偏狭的に、自我自尊的な「万邦無比論」として国体論を独善化し、誤った方法により、「八紘一宇」というスローガンをかざし、対外進出へと道を踏み外す者もいた。

その独善的な天皇主義を振りかざす人々が、昭和天皇ご自身の意図をも意に介せず、国民に対しても高みから言論弾圧的に臨んだ。外国住民にもその国の文化的、歴史的な由来を考慮せず、日本の国民的伝統をそのまま普及し、もって大東亜共

栄圏を形成できる、と誤認したのである。

私がこのノートで、先に、日本の天皇の価値を再度省察する必要があると述べたのは、この反省に立つからである。私は、決してこういう唯我独善的な国体論をそのまま再興しようというのではない。

日本の天皇に現れている本当の忠誠心というものを見出し、それを国民のいのちの中に働かせるということである。そして、われわれ日本は、日本国も日本国民も、地球人類の一員として、謙虚に自らの徳を高め、いのちの力を開発し、他の国の国民とともに生きるのである。元来、それこそが「八紘一宇」の真の意味でなければならぬのであった。

これは、既に説明した通り、慈悲慈愛の精神と、寛大な心と、一切を謙虚に自己に反省するという精神と行為であり、決して偏狭な自己優越感情に凝り固まって、独善的に振る舞うという程度の国体論ではない。そういう類いの偽の国体論は、これまでの歴史において、日本だけでなく、各国に出現したが、それは既に人類の歴史の上で破産を証明された。

われわれは、歴史からこの点を深く学ばなければならないのである。この点を、くどいようであるが、力説したのである。

結局、忠誠心とは、個人から、家族、国家、全人類という重層構造において現れながら、それぞれの段階の人間の働きに方向づけを与え、分裂しがちな力の統合し、発揮させる精神的な大黒柱である。

⑤補完性の原理——忠誠心の階層構造——

以上のいろいろな忠誠心の体系は、個人から始まり、家族、地域社会、学校、職場、国家、そして地球人類社会に住むわれわれの心の保ち方^{かた}の問題であるが、それは、全体として望むらくは、一貫性を持たねばならない。

もしも、一貫性を欠くならば、個人と国家の方針が対立したり、国家の方針が世界平和と対立したり、会社の方針が各国家の方針と対立したりするという危険があり、それぞれのいのちの力がぶつかり合い、十分に発揮^{はつき}されない事態^{じたい}となるのである。

ここに、人間社会における「補完性の原理」というものと忠誠心とのかかわりが現れてくる。この原理は、先の国家改革のところでもとりあげたが、忠誠心のかかわりで再び光をあてよう。(以下は、ヨーゼフ・ヘフナー『社会・経済倫理』同文館、を参照。)

まず、われわれ個人は神仏につながる掛け替^かえのない人格であり、この世の一切の事物はこの神仏の似姿^{にすがた}たる人格のために

働くのである。これは人格的忠誠の原理である。

この人格の原理から出発して、次に連帯の原理が考えられる。すなわち、「一人は万人のために、万人は一人のために」といわれるように、各々の人格は相互に尊重し合うという相互的忠誠の原理であり、人格と人格の不可分の相互関係を自己^{じたい}不二^{ふた}と見る。

さらに、補完性の原理とは、個人としてできることは個人で行い、さらにそれではできないことは国家が行うという考えであるが、今日ではもつと拡充^{かくじゅう}して、国家にもできないことは国家的な協力で行うというものである。

結局これは、できるだけ身近な範囲で責任をもって物事を行うという原理であり、重なり合った重層的^{じゅうちゅうてき}な忠誠の原理である。

忠誠心とは、このような段階毎に、それぞれの任務に対し、自己^{じこ}を捧^{たも}げることである。

それぞれの段階の忠誠心は、異なる任務を果たしながらも、輪投げゲームのように、それぞれの段階の大小の輪がすべて共通の心棒^{しんぼう}に懸^かかり、各々が様^{さま}で自由な動きを認められながらも、ばらばらにならないで纏^{まと}まることが望ましい。

これを「多様の中の統一」でなく、「統一の中の多様」と呼

ほう。(アマタイ・エチオーニ『新しい黄金律』麗澤大学出版会、を参照)

また、過去にはしばしば、全体主義でのように、国家が強圧的になり過ぎて、個人や家族やその他の下位の共同体を抑圧することがあった。上位の共同体は、個々の人間とその人格を活かすためにこそ存在するのであるから、各人と下位の共同体のいのちを自由に發揮させるように、役割を補うことに徹しなければならぬのである。

各々の人格と共同体が一方的に、個人から国家へと、滅私奉公を求めることなく、国家もまた個々の人格に奉仕しなくてはならないのである。

もちろん逆に、各人と下位の共同体は、自己利益のみを目的として自由勝手に振る舞うのではなく、他の個人と共同体がより良く活動できるようにと、調和的に任務を果たさねばならないのである。

歴史の変化とは、このそれぞれの段階の共同体の間での役割の補い合い、組み合わせ、の変化にほかならないのである。

結局、人類の歴史では、概ね部族の中に家族を生じ、部族の拡大したものが民族となった。そして、一つあるいは複数の民

族が政治団体を造って、団体のメンバーのいのちと信仰・文化と私有財産を守るといふようになれば、今日に見る国家と国民が成立する。

しかも、国家というものは、一つの纏まりのある生態系を基礎にして成り立つ。風土・生態系と国家とは切り離せない。

ニュージールランド、オーストラリア、カナダなどは、元々イギリスの人々が移住して造った植民地であり、英国女王がその元首であったが、イギリス本国と遠く、風土が違い、移住後、二代、三代……と歴史を経るにつれて、独立することになった。

ところが、今グローバル化の時代となつて、そういう従来型の国家を踏み躪える動きが現れているわけである。

これを生態学の観点から理解するとどうなるであろうか。

まず、人類の歴史には、他の動物の歴史と決定的に異なる性質が秘められているのではないか。他の動物は、一つの地理的に限定された生態系に縛り付けられた生活を続けるのに対し、人類は移動——交通と通信——により、狭い生態系を越えて遠くの生態系にまで行動するというのである。

もちろん、魚類には、ウナギとか、マグロやサケなど、大洋を何千キロと回遊する物もいるが、それでもその経路は帯のようには決まっている。その回遊帯が、その魚類にとつては一つの生態系であり、それを抜け出すことはまずない。

既に述べたエコロジを応用した歴史観からすれば、人類が一つの生態系を乗り越えて他の生態系に出掛ける方法には、次のものが存在する。

- ① 相利共生 交換・売り買いという方法
 - ② 片利共生 贈与・慈善という方法
 - ③ 捕食 略奪・収奪という方法
 - ④ 寄生 貢ぎ物(貢納・納税)という方法
- (こうしたエコロジを歴史に適用したものととして、小田信『歴史でみる世界』NHKテキスト、参照。)

大陸では、古代から明の時代の頃まで、かの万里の長城を漢民族に造営させた。それは、中央アジアの匈奴という民族の圧力であった。匈奴が漢民族の土地に襲いかかり、略奪を繰り返したからである。匈奴の住む生態系は、中央アジアにかけての草原地帯であり、安定した穀物の生産に不適であったのである。

匈奴と漢民族との関係は、匈奴からすると、収穫時期に穀物を漢民族から奪って行くという捕食の関係であり、また食い殺す所までは行かないときには、漢民族への貢納を要求する寄生の関係でもあったわけだ。

しかし、こういう敵対的な関係は、お互いに利益を与え合い

増加させるものではないから、じり貧となり、遂に極貧となつて、破綻する。一方的に相手に利益を与える片利共生、あるいは特に、相互に与え合う相利共生でなければ、永続的な方法とはならない。

匈奴の優位は、既に紹介した漢の武帝のときに、やがて漢民族の抵抗・反撃に遭つて、崩壊した。相手に与えず奪うばかりだったからである。漢民族は、武帝の出現とともに、いのち集団の力を飛躍的に高めるのである。優れたリーダーとは、集団のいのちを救済する人である。

人類は、二十世紀に、まず工業化、そして情報化によつて、生命活動の水準を格段に高め、各民族、各国家が交易により有無相通じるといふ方式を積極的に認めるようになった。それが国家における経済の自由化、民営化、そして現代のグローバル市場革命であり、またグローバルなポランテティア革命であり、コミュニケーション革命である。

ただし、この段階で注意すべきことがある。「地球の生態系を画一化にしてはならない」ということである。文明は、各地の風土にに応じて、できるだけ多様性を保存するほうがよい。

一九九〇年代以後、中国の目覚ましい経済発展に触発されてか、「東アジア共同体」を作ろうという構想が盛り上がっている

る。ある面では尤もなことではある。私も長年、そのように見
てきた一人である。

しかし、よくよく考えてみると、国際間の共同体というものは、
そうそう簡単に作れるものではない。国家を作ることに比べてみると、「
国民国家形成」(ネーションビルディング)の場合と同様、共同体作りは、
次のような四つの側面からなる(故・板垣與一教授の理論に基づく)。

- ① 共同体政治 政治を統合し共同体憲法を定め、意志決定を行う統一議会を持つ。
- ② 共同体経済 域内どこでも人間が移動して資本、市場、企業の活動を自由に放任する条件を作る。
- ③ 共同体社会 域内の市民に居住の自由を保障し、あたかも一つの国のように人口移動も自由に開放し、交通・通信を自由化する。
- ④ 共同体文化 一つとは限らないが共通語を定め、それに基づく教育を行い、異なる文化伝統を保持し、各自の信仰の自由を市民に保障する。

東アジアで共同体を作るとすれば、もつとも障害となるのは、
中国の社会主義政権と、韓国の親北朝鮮政権の動向である。この両政権は、
日本に対し、歴史認識という点で批判攻撃

の矛先を緩めないし、竹島と東シナ海の領土問題でも歩み寄らない。
日本は「大中華主義」と「大国追従の半島人氣質」に警戒を怠って
はならない、と言いたい。

東アジアとは、この他にロシアの東シベリア地域も含められる
であろうが、ロシアは日本に対して北方領土の未返還のように、
帝国主義侵略を未だに続けている。

次に、経済では、物の売り買いと金銭及び情報の遣り取りであるから、
これはそれほど難しくない。だが、「労働力」(人間の)の移動となると、
共同体はどだい無理である。

もしも、東アジアで現在の経済格差を前提とし、今の各国間の
国境を越えて労働の移動と居住の自由を保障すれば、日本に向けて、
特に中国から膨大な人口が百万単位で雪崩込みである。そうすると、
日本文化も社会秩序も攪乱され崩壊され尽くすであろう。外来人による
犯罪率もウナギ上りとなる。

日本政府は近く中国人へのビザの規制を大幅に緩和しようとしている。
だが、外国人労働者の安易な拡大は疑問である。

東アジア大陸上で、歴史を調べると、漢民族が周辺民族の居住地に
雪崩込み、瞬く間に同化し支配してしまふ事実があったし、今もある。
この事実をよくよく見なくてはならない。結果として、これは帝国主義
なのである。

インド亜大陸上でも、インパールや、シッキムなどでも、ヒンドゥー及びイスラムの多数派民族人口が雪崩込み、「人口帝国主義」の紛争を起こしているのである。

帝国主義とは、レーニンがその『帝国主義論』（岩波文庫）で定義したような「資本主義の最高の発展段階としての帝国主義」だけではないのであり、そういうふうに限定すると、大規模な他民族支配を行ったロシア・ソ連の行動も——近所のそれと似た国家も——帝国主義にほかならないが、その世界史の事実を無視させるだけである。

帝国主義では、武力による征服と侵略というものは手段の一つに過ぎず、資本進出も手段であり、市場の獲得と労働力の支配がその目的だが、さらに究極は他民族の文化的同化と支配なのである。

東アジア大陸では、少数民族自治などというが、南西地域、チベット、ウルムチ、北のモンゴル人地区などで、まさしく漢民族による同化支配となりつつあるのではないだろうか。皆さんはどう見られますか。陸続きの場所であれば、そういうふうな国家拡大も、帝国主義ではないのだろうか。

東南アジアでも、タイのバンコクなどは本来のタイ語の都市名を失い、東南アジア各国では華僑が経済を牛耳ってきた。

マレーシアでマレー人から華僑への自己防衛として起こされた人種・民族暴動を忘れてはなるまい。「華僑のシンガポール」はなぜマレーから独立したのか。

EUでも、ドイツがいい気になって数百万のトルコ人を安価な労働力として輸入し、そのつけを今支払うはめになっている。フランスもイギリスも昔の植民地からの移民を許した——受け入れざるを得なかった——ので、社会的混乱は少なくなる。

急激な大量人口移動は「人口帝国主義」という名の「侵略」ではないか。ヨーロッパ白人が南米両方の大陸に雪崩込み、支配したのはこういう「人口帝国主義」であった。グローバル時代の問題として、人口帝国主義を決して無視してはなるまい。

共同体を構築するには、域内での人口移動の自由開放が基本条件であるが、東アジアの現状は、この条件を成り立たせないだろう。

深い思慮もなく流行の気分に乗って、東アジアでの「共同体論議」を打ち上げるのは各人の勝手であるが、自己の言論の結末に責任をとるべし。そういう気分的で「安易な言論」を弄ばないことだ。

EUの実験から目を離さないことである。

忠誠心と公共心の関係

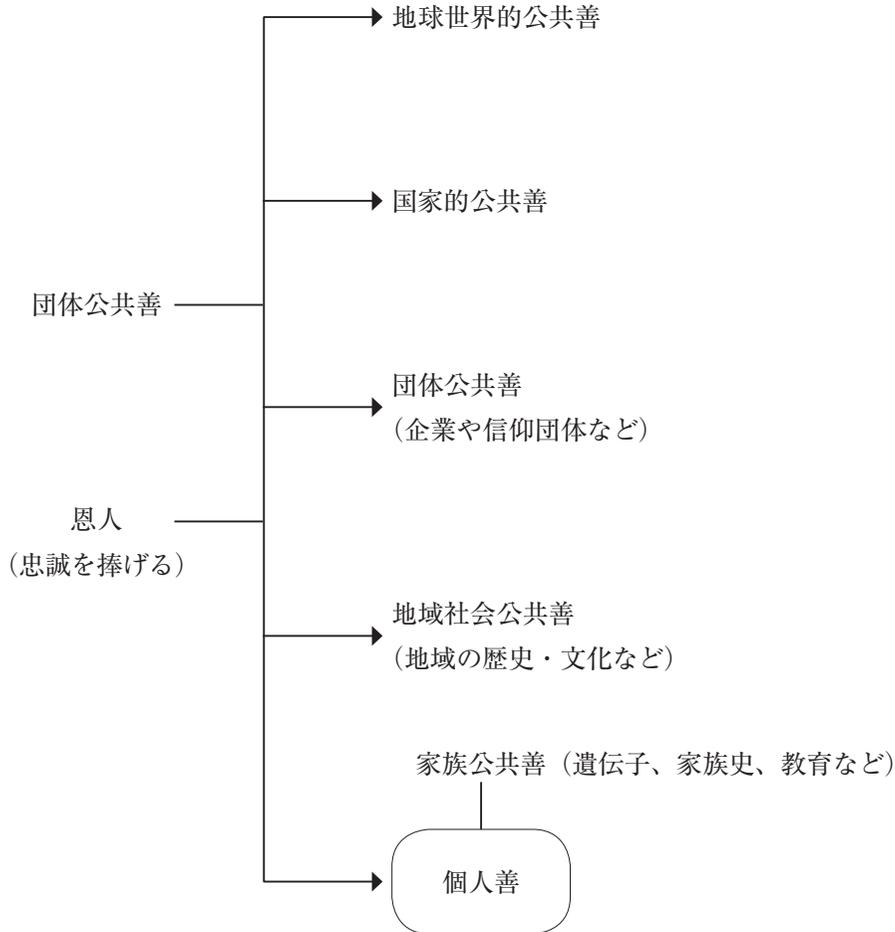
命題1：忠誠心は公共善に応じて階層構造を持つ。

命題2：忠誠心はより身近に感じるものに強く現れる。

命題3：人は最も重要なものに気づかず、忠誠心を抱かないことが多い。

命題4：グローバル化は国家への忠誠心の位置づけを限定し明確にする。

命題5：個人は相互依存の中の個人であり、利己的忠誠心は永続せず。



(注) 忠誠心とは、何かに対する愛着であり、信頼であり、献身の心である。人はまず自分に忠誠であり、次に家族に、そして国家に、また会社などの利益団体に、あるいはボランティア団体、そして信仰団体に、さらに現代では人類平和や地球環境などグローバルな価値に対して、それぞれ忠誠心を抱いて献身する。忠誠心に基づく献身は、労力、金銭、精神の誠を捧げることから、いのちを捧げることにまで及ぶ。日本の先人は、それを「報恩」という言葉で表した。

これは決して排外主義や攘夷論を主張するものではない。何が本當の侵略であり、いかなる侵略が人類社会を不幸にさせるものか、を考慮する立場である。これは漸進主義の歴史論なのである。人類社会の開発の凹凸を平均化し、人類社会の不正を減らすには、人口移動よりもっと他に害のない方法を考案しなくてはならないのではない。

人口移動の自由解放は、無理である。各国の国民は、地球上で一所懸命、自分に与えられた土地に定住して働き、その成果を他の諸国民と有無相通じることではないか。

だが、根本の問題は、今日の人類文明が安定した地球の循環を揺るがし、限界を踰えてきていることにある。さらに、地球の一部の生態系ではなく全体の生態系を、共同で利用するようになってきている。そこで、われわれは、異なる小さな生態系の間でお互い無いものを他から求め、また他に提供し、有無相通じるといふ交易（売り買いや贈与）の関係に留まらず、新たな関係を構築しなければならぬ。例えば、地球温暖化の問題は、売り買いとかボランティアだけでは、必ずしもうまく解決できないようだ。

人類は、一つの船に乗る運命共同体となった。この共同の船をどのように漕いで行くか。

五 歴史における郷土の形成、家系の永続、信仰の働き

これまで、「いのち史観」としてさまざまなことを申し上げてきた。そこで最後の最後に、以下のような結びを申し述べて、このノートの筆を擱きたい。

それは、郷土・地方における家系の永続、家系と郷土を支える信仰、それを基にした国家の発展というものである。

それは祈りということであり、永遠のいのちへの希いということである。これは、主に高等宗教が共通に伝えてきた叡智と実践であつて、人類の精神を耕すことを通じて歴史を動かす最強のパワー・霊力を開発するものである。

歴史の行程を辿ってみると、人にも国にもいろいろな運命があるということが分かる。人間には、一見すると強いように見える人物もいるが、人間など強いように思えても、実にはかない存在であり、弱い存在ではないか。

たった三分間の呼吸停止だけで、明から幽へと住い移さねばならない。また、人には性悪の面もあり、性懲りもなく戦争を繰り返す。

そこにわれわれは、絶望に到り着き、自然必然に祈りという行為が生じるのではないか。

どうも、人類は、絶望して祈らないではおれなくなるのではないか。人類の歴史には、祈りとか祭りというものが、重要な役割を演じているのではないか。

最近、肺ガンにかかり、手術をし、それでもなお回復できないので、しかたなく大学を辞めた一人の若者がいる。その若者から、こういう意味の手紙が届いた。

とうとう、体力が回復しませんから、大学を辞めます。
 在籍して必死で頑張ってみましたが、通うのが辛いし、治る見込みもないので、泣きたいほどですが、退学いたします。
 さようなら。

また、筋ジストロフィーの若者もいた。
 同じ人間だというのに、運命に、なぜかくも大きな開きがあるのだろうか。

これは人類の歴史のうちの、個人の人生という問題である。
 今の日本の大学は、一見すると楽しい楽しい「遊びの園」のようだ。多くの学生は、健康で一所懸命に学問し、大学祭も熱心にやり、卒業していく若者たち。しかし、ろくに教室にも出ず、代返でごまかし、遊んでばかりいていい加減に過ぎ、落

第スレスレの低空飛行で卒業して行く者もいる。

大学の教員の中には、よく心得た方も居られて、年二度ばかりのペーパーテストだけで成績をつけ、単位を与える。出席などそれほど気にしない。反グレシャムの法則——良貨は悪貨を駆逐する——といったものは、日本の大学には現れてこないのだろうか。

これは現代の若者がおかれた運命であるが、些か「私的」である。しかし、昔、農民は天を仰いで溜息をつき、首を齧る者さえいたと聞く。嵐や冷害、干ばつ、病気や虫の害によって作物が実らなかつた。あるいは、戦国時代であれば打ち続く戦乱によって、せつかく作つた田畑を敵の兵士たちにより踏みにじられて作物が穫れないこともあった。

商人ならば、相手を信用して掛け売りにしていたのに、その代金を払って貰えず、店が倒産して一家が夜逃げしたという事実もある。

人生は、不確かさと苦しみと、また、楽しみとに、満ち満ちている。歴史とは、悲しみと悦びとの諸行無常のようである。

そういうときに、人々は天に、神仏に、祈り、神仏を相手に祭りをするほかない。祈りとは心の行であり、祭りでは集団が

天地自然に、神仏に、感謝し、お願いし、祈り、誓う。人類の歴史には、外からは眼には見えないが、そういう精神が人々の心の中に働いていて、行為が営まれている。

現代、日本の何々市史とか町史、村史など、地方史、郷土史を繕けば、必ずと言ってよいほどに、開拓者たちがおり、彼らが田畑を拓き、例外なく神仏を祭り神社やお寺を建てた。

全国的に数が多いのであるが、あの九州大分県、豊の国の宇佐から宇佐八幡三神——応神天皇、比売神、神功皇后——を勧請して、水源地に近いような山奥に祭るところもあった。実際、八幡宮は全国に分布する神社である。

なぜ山奥かというと、それは武士団というものが盛んに興り始める九、十世紀、そして源平の戦い前後からの、諸氏、諸豪族、諸国・諸邦の間の定住の仕方とかかわりが深いのである。

今の自動車時代の道路と交通事情から判断すれば、全く想像もつかないが、昔の「歩き」の時代には意外と国境（くにぎかい）となるような山波の連なる奥地こそが、幹線道の伝わる場所であり、その山の谷や山のひらに、人々は田畑を開拓して村を営み、山と谷を天然の要害とし城壁の代わりとして村を防御するという、地理的配置を工夫していた。

だから、そういう意味からして、今では一見、辺鄙な所にこ

そ、神社や寺院というような精神の中心にかかわる重要施設が設けられた。生活と、それを護る戦いと、生命の祭祀の舞台が、そういう天然の城にあったからである。

平野はもちろん不可欠であるが、各地の平野ばかり観察すると、歴史を読み間違えう。山と川と海を忘れてはならぬ。山も川も海も道なのであり、道こそ歴史の血管であり神経回路なのである。古道に着眼あれ。

こうした歴史の事情は、おそらく外国でも同様であったろう。そこで、神仏を祭ることは精神生活の基本であったのである。北米の地図を広げると、「何々トレイル」(Trail 街道)と砦(Fort)という地名が多く存在する。敵は原住民(インディアン)か、白人——といっても自国でなく他国の植民者たち——であった。

いずこにも、神社と寺院とが豊富に見出されるといのが、日本列島の各地方の実際の姿である。今われわれの世代は都市化人間となり、旅行に出たときの観光施設としてしか、神社にもお寺にも訪れたことがない、という者が多くなりつつある。けれども、かつて先人たちは、生活の中で、先祖の霊と天地自然の神仏を拝み、敬虔に人生を送ろうとした。

もちろん、過去の時代には、一面、気性が荒く、隙あらば他人の土地と住民を奪おうとする者たちが横行していたから、人々は絶えざる戦乱の中に生活していたわけである。

武士も、そして戦に駆り出される民衆も、親子親族の待つ村に元気で戻ってくるようにと武運長久を祈願した。戦に勝つことと神仏への崇拜とは、毎日、切っても切れない心掛けであった。戦に負ければ、生きていても、郷土を追われ田畑を奪われることも多かつたであろう。

日本人は、文武ともに、極めて信仰篤い民族であるほかなかつたのである。

郷土史は、いづれを手にとってみても、歴史の地下水として、どこを掘っても信仰が見出される。日本の場合、それが排他的な一神教でないところに、融通無礙な柔らかい文化が育つた理由がある。日本列島上、宗教間の争いは、数少ない例外でしかない。信仰は争いの種ではなく、人生を扶助するものだったのであろう。

宗派に分かれ教団に分かれる宗教というより、信仰というものには、心実の核心が凝集されるのであろう。その場合、信仰が子孫繁栄と一族・国民、さらに人類の永続に役立つには、望ましい構造条件が必要なわけではないか。

それは、先に補完性の原理でも、また忠誠心の構造でも述べたところである。人間の個人としての安心立命と、いろいろなレベルでの集団・共同体としての統合と一致団結とを矛盾なく導くような作用を演じることである。

すなわち、信仰は、次の点を矛盾なく纏めて見通しを与えるものでなくてはなるまい。

- ① 時代の大勢を示す。
 - ② 国家社会の発展の方向を示す。
 - ③ 一族の団結と繁栄をもたらす。
 - ④ 家族の協力をすすめる。
 - ⑤ 個人の安心をもたらす。
 - ⑥ 死後の魂の救いを与える。
- 多少の揺らぎや矛盾や擦れを孕みながらも、ともかく統合し生き生きと働かせるもの、ということである。
- この全体の整合を欠くならば、信仰とか宗教は、人間のいのちに矛盾と亀裂を生じさせ、争いをもたらし、いのちの永続を阻害する。その事例についてもまた、歴史は確かな目撃証人となる。

人類は、信仰の上でも、常にテストを受けつつあるといえようか。

ところで、後の時代に毛利元就の第二子・元春——吉川に養子に入り吉川元春と称した——とその子孫が預って支配するところとなる周防の国は、長州ではなく防の方、江戸時代は公式に三万石、通称六万石の小藩にすぎなかった。現在、山紫水明の盆地で錦町というところがあり、周囲にいづくも深い岨々たる溪谷を控え、この山里は、昔から山代（やましろ）と呼ばれて来た。

毛利氏は、元就時代に安芸の国の吉田荘から身を興した戦国武将であるが、その祖先は都から東下して鎌倉幕府の将軍・頼朝の相談役として仕えた大江広元であり、神奈川県、相模原あたりに荘園があったが、子孫が安芸吉田の荘に土地を与えられて赴任したものであるという。

有名な話だが、元就が死の床で子供三人に諭した「三矢の教え」に象徴されるように、三人の子供の一人が豪族吉川氏に婿に入り、吉川も毛利一族となったのであったが、実質、吉川家の乗っ取りに等しい次第であった。この間の経緯は、岩国市編纂の『岩国市史』に詳しい。（上巻、二二六～二二八ページ）豪族・武将たちにとって、末永く子孫を伝えることは、人生最大の目的であったのである。しかし、それがなかなか、容易なことではなかったのである。

なお、吉川家は遠く藤原南家、武智磨の四男・乙磨の分流であり、はじめ駿河あたりにいた豪族であったが、平将門の乱を鎮めるに功あって栄え、源氏の鎌倉幕府に属し、毛利に従って中国地方に進出した。室町時代から戦国時代にかけて、一族は、あるいは足利方に、あるいは南朝方にと支持を分けたが、安芸に落ち着く吉川の系統は、はじめ山口の大内氏に属し、尼子との争いに翻弄されつつも用心深く生き延びる。

ちなみに、大内氏は、百濟（ペクチエ）の王族の別れであり、聖徳太子の頃、日本に渡来し、西日本に勢力を腐植した豪族である。

ともかくにも、戦に勝利することは、人類の歴史において不可欠の条件であることが、これでも分かるのである。戦もまた、暮らしの一部であった、否、もともと基本の活動であった。現代でも、目に見えぬ戦が続いており、そうと言えるかもしれない。日本が大東亜戦争に敗れたことが、いかに災いしていることか。

吉川氏は、戦の時代に、段々と力を蓄え、特に尼子方と石見银山（現在は島根県内、江戸時代は官領・大森银山）の争奪戦を繰り返し、毛利方が勝ってそれを手に入れ、それが莫大な軍資金の原資となったのである。戦の裏に金銀・貨幣あり、か。

毛利氏は、大内が滅亡した後、文字通り中国地方の筆頭勢力となり、豊臣秀吉をてこずらせる。毛利と吉川の養子縁組は、意味の深い出来事であった。その銀山の勢力あったればこそ、毛利が明治維新を生み出す倒幕運動の一方の旗頭たり得たからである。

先に述べた山代地方は、日本海側の石見及び出雲とともに、大内氏と尼子氏の鬩ぎ合いの地域であったが、そこに毛利方が激しく攻め込んで、山代の人々は連合してそれに抵抗し、折に触れ戦の絶えなかった地方である。

山代の人々は何かという戦に駆り出された——人々は勇んで参加することも多かったであろう。どちらにせよ、人々は上下階級とも、落ちていて田畑を耕すことさえ俵ならぬ暮らしてあつたろう。

この地方は、安芸の国と石見の国と接し、周防の国の東北端に位置して、山いよいよ険しく、決して人の住めるような場所でないといえるが、それでも人々は山隘に分け入り、山のひらに棚田や畠を開いた。四国の相谷地方のように、耕して山頂に至り、山腹にへばり付いて人々は生きた。そういう祖先の人々の心の苦しみや悩みが、おのずから信仰を求めさせたのである。

人々は、毎日、朝夕、春夏秋冬、神仏に祈らないではおられなかったであろう。そして、その信仰は、神仏にお願いするのではなく、より深い祈りなのであった。『錦町史』同町、山口県、土地の開拓と信仰との関係は、一〇五ページ以下。)

こうした地方史から積み重ねて日本全体の歴史に光を当て直すと、歴史における家系というものの大切さが明かとなる。

氏族の衣という意味では、後醍醐天皇による建武の新政は、僅か三年ばかりの期間の出来事であったが、重大な意味を秘めていた。それは、武士からの政権の奪回、天皇・朝廷による親政の再興を図る挑戦であったといえる。日本史では、十世紀の中世から十九世紀近代の明治維新まで、何度か繰り返された源氏、平氏、天皇・皇室の間の——氏族の間の——政治の実権の取り合いであった。

日本の歴史では、政治の実権が源氏に移り、源氏から平氏・北条氏に移り、やがてその実権を建武時代に倒幕によって、後醍醐天皇が回復しようとしたわけである。これがすべて「氏族という衣」をまとったのち集団の交替であったのである。これまで述べたところと若干重複となるが、振り返って纏めておこう。(第十章、図「日本の歴史」を参照)

まず、東北の蝦夷征討から源平の戦いにいたる過程で勝利し、朝廷から政治の実権を認められた源氏・源頼朝が一一九二年、鎌倉幕府を開始する。

鎌倉幕府の実権を源氏が執っていたが、頼朝一族の天下はあつてなく三代で終わり、次には平氏の後裔である北条氏が執権を握る。頼朝の家族観念に欠陥があつた。

頼朝を支援した北条氏は、平家の末裔なのである。すなわち、源頼朝は、妻・政子の父であり舅である平時政の支援を受けるが、鎌倉の源氏は、弟の義経を滅ぼすような狭量的人物が開始したので、頼朝、頼家、実朝という三代限りであえなく滅ぶ。後は平家・北条氏が実権を握るのである。

その鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇による建武の新政は、長い間その武家の手にある政治の実権を天皇・朝廷が回復したいという運動であつた。元寇の役の後、北條得宗の時代に弱体化し墮落の極に到つた平家・北条氏は滅ぶ。だが、その後を継ぐうとした後醍醐の新政も成功せず、源氏一派である足利尊氏（高氏）が室町幕府を立てる。結局、再び源氏が政治の実権を掌握することになる。

さらに、長い戦国の後に全国を統一した徳川氏は——百パーセントの信用はできないが、源氏の系統を引くというから——ほぼ十一世紀以来、政権は源氏、平氏、源氏、というように交

替し、主に源氏が、継承してきたわけである。

明治維新とは、こうした流れの上で、天皇・朝廷が政治の実権を回復するものであつたといえる。王政復古の背景には、このような古来から続く氏族という形でのいのちの系列の交替があつたのである。氏族は、いのち集団であるとともに、その長はそのいのち集団のリーダーなのであるが、結局、氏族のリーダーが日本のそれまでの歴史を左右してきた。

現代のイラクでも、アフガンでも、アラブ社会は氏族の間の政治であるといわれるが、日本も明治維新くらいまでは氏族政治と異ならないのである。維新後、大日本帝国憲法時代までは、主として天皇・朝廷において、天皇家・皇族という古代氏族の中心が維持継承されているわけである。

現代はしかし、政治家の世襲が少々取り上げられるくらいで、氏族という形での血縁集団は崩れ去つたようである。それでも完全に消え去ることはなく、しぶとく残つてはいるが、人間を家系という「いのちの繋がり」において捉えるのでなく、バラバラの個人としてしか見ない個人主義の時代になった。

家系というようないのちの水の系統は消えないまでも、地下に潜るのであろう。意識が砂漠になり、その砂漠に吸い込まれ

るのであろう。いや、家系を論じること自体が、人間性に反する、人間差別になる、などと批判されるのである。果たしてそうであろうか。決してそうではない。

世界も日本も、確かに資本主義の体制となつて、暮らしの基礎が変化し、同じ家系が同じ仕事を受け継ぐということができなくなり、住むところも大いに移動して、家系という氏族を把握することが難しくなつた。これが人の世の流れというものか。もはや、氏族・家系と仕事とは結びつかず、特に政治のリーダーと家系とは切り離されている。それが民主主義というものか。

実はいのちが続く限り、家系というものは——男系であれ女系であれ混系・双系であれ——消えることはなく、細々とではあれ辿ることができると。人間誰しも、仕事は種々に変化するが、家系を続けいのちを永続させたいという希望は価値ある希望ではないか。

現代の人間観では、人間を繋がりの中で位置づけることを極力嫌う。家というだけで、毛嫌いする人が大多数である。

しかし、家系を否定する思想は心の本根に反する過剰な拒否反応であろう。例外はあるが、誰しも自分の子孫を欲しがり、

授かった子供に立派な教育をつけようとする。読み、書き、算盤を習わせ、武術を教えた昔も、習い事に通わせる今日も、子々孫々、家系を続けたいからではないか。滅んでもよいなら、そんなことをしないだろう。親たるものも、自分が何をしてるか、その意味を深く考えるべきだろう。

歴史の流れを家系の連続と縁組として、男女系いずれにしても血縁の繋がりが、かつ精神文化の繋がりと捉え直すということは、少子化の時代ならなおさら、緊急の意義を帯びて来ているのではないだろうか。夫婦の姓名の問題なども、こうした歴史的な観点から理解されるべきであろう。

現代日本の少子化は、生命の永続ということについて、強烈な願いが衰えたこと、民族の生命力が減退したことの自然の結果ではないか。「子育てが難しい」などというのは、生命力の弱さの表れにほかならないのではないか。

男女とも、若いうちに生命としての本能に基づき、子孫を残し、子孫を繁栄させたいと願って、生命力を発揮すべきものではないか。

急激な少子化という現代史の重大問題は、いのちの本当の姿である先祖の苦しみ、悲しみ、喜び、恩恵、こう言うものを教えない現代の人間観から来るのではないか。そういうことを教

えない歴史教育、歴史認識は、意味がない。われわれは、身分差別的な意味でなく家系、新たな家系というものに思いを致し、「永続的な生命力」の形を創造しようではないか。

無味乾燥な制度の移り変わりを辿る歴史というより、人間の歴史の学びは、ここから始まるのではないだろうか。

われわれは、永遠なるいのちの連続を家族の系列、すなわち家系として理解する歴史観を、新たに創造すべきときに来ている。いくら個人主義の世の中になっても、個人は家系を背負った個人であり、家系なしの個人というものはあり得ないからである。いのちの本質は連続の実現にあるのである。

そして、家系は過去の家系というより、未来へと続けるべき家系である。過去の家系を誇ったりする心でなく、未来へと創造するものである。

六 歴史における個人の悟りとは

いのは、永続を求める。そのいのちは家系として続くものである。その系列の上で一人ひとりのいのちは、存在意義を探し求める。それは祈りであるわけだが、宗教学の専門家によれば、祈りにもいくつかの段階があるといわれる。

故・岸本英夫博士（一九〇三〜六四）は、元東大教授、宗教

学者で、ご自身が皮膚ガンに罹り、苦しみながらも、さすがに段々と悟りを開かれた方だが、その悟りとは、整理すると次のようなものであるようである（『宗教学』大明堂、『死を見つめる心』講談社文庫）。私も近々十五年くらいの間に、数度の病と入院を通して、このような諦めの段階を少しずつ経験しつつある。

① 請願態

神仏に、自分の願いを叶え、「何かを恵んでいただく」ようにと、お願いする段階から始まる。

「どうか病気が治りますように」

「作物がよく実りますように」

「商売がうまく儲かりますように」

「家内安全でありますように」

② 希求態

病気であれ、仕事上のことであれ、人との愛や諍いであれ、すべて毎日経験する生活上の課題が、天地とか神仏の与えてくださった試練であると悟る。

それに取り組むことが使命であり、天職であり、召命であると自覚し、一切の物事を意味のあるものとして受け容れられるようになろうと努力する。そうなると、少しだけ安心が得ら

れる。

③ 諦住態

さらに、もう一歩進むと、「日常的な価値は、そのまま受け入れながら、これに加うるに、それよりも高い段階の価値を見出して、その中に住する」というところへと、飛躍する。

神谷美恵子（一九一四〜七九）という方は、ハンセン病のケアに生涯を尽くされたのであるが、同時に一貫して「生きがい」の研究を通じ、素晴らしい成果を挙げられた。ローマ帝国の皇帝で哲学者でもあった、かの有名なマルクス・アウレリウス『自省録』の訳者でもある。

私は、これまで先生の作品の愛読者の一人であり、その『生きがいについて』（みすず書房）から、実に多くのことを学ぶことができた。この書は、生きがいの喪失から、生甲斐を再度、獲得する歩みについての実地の研究である。

われわれは、歴史の大きな川の流れにおいて、ついにある精神の境地へと到達し、生き生きと生きるようになる人物が実在することを知らず。それが、「諦住態」にある人なのである。『サター・リサータス』の一節から、次のように訳して紹介

しておられる。

私は新しい天と新しい地へとめざめた……

自然とは何であるか。あゝ、なぜ汝を神と名づけないのか。汝は「神の生ける衣」ではないか。お、天よ、汝を通して語るは実に神なるか。汝において生き、かつ愛し、我において生き、かつ愛するは神なるか。……

宇宙は死んだのではない、悪魔的なものでもない、亡霊の満ちたる納骨堂でもない。神のもの、わが父なる神のものなのである。

また私はわが同胞である人間たちをもべつの眼でみることもできるようになった。無限の愛と無限のあわれみをもつて……

お、わが兄弟たちよ、わが兄弟よ、何故私は汝を胸にかくまい、汝の眼からすべての涙を拭くことができないのか！
（二四九ページ、ルビ追加）

これはもちろん、キリスト教を背景とする文化の中での心の描写である。「父なる創造神」の考え方が現れており、母でなく「父なる神」、姉妹でなく「兄弟」、それに日本文化においては耳馴れない「悪魔」など、文字表現とその觀念に多分なじみの薄い人もおられるに違いない。それが人類の言語文化の差

異というものであろう。いわば、パンとブドウ酒か、ご飯と日本酒か、「どんな食物を食べて育つか」の違いのようなものであろう。しかし、これは単なる上辺の多様性であって、気にすることはない。

この文は、「父なる」とせずただ神とし、兄弟姉妹とし、悪魔などという存在を持ち出さなければ、キリスト教徒でない日本人にもスツと心に入ってくる自然的生活の境地を示唆する。宗教の違いを乗り越えるには、真理に着せる「衣にこだわってはならない」のである。

もちろん、衣は寒暖により、ときに処、場所にに応じて品を変えねばならない。しかし、衣が包むものは「いのち」であって、同一のものである。

こういう種類の言語と観念を自分が採用するかしらないかはともかく、このように絶対肯定かつ絶対前進のいのちの姿が、西洋人の一人においても到達される、そしてそれに注目する人間がこの日本にもいる。このことは、歴史の真実かつ心実として認めなければならない。

そこに何か、文化や国の違いを超えて、隠されたものが働いているのではないか。

歴史から何かを学ぶということの「何か」とは、その究極は「生きがいと死にがい」にほかならないであろう。

神谷先生が、カーライルという西洋人のこういう悟りを紹介され、そのお陰で別の日本人がそれに出会い心の安住の境地を得るといふことも、人類が国家に別れて戦争し殺し合いをするといふ悲しい現実も、同じように人類の歴史に現れてくる事柄である。

歴史とは、なんと不思議なドラマであることよ。

歴史の舞台には、このように心理や境地は異なるけれども、信仰というものが強い力を發揮して来ているのであって、人類の歴史を学ぶに際しては、こういう側面を見逃してはならないと思う。

しかし、祈りにも高低いろいろなレベルがあるのである。

真の祈りとは、「神仏の心を学び、それにしたがって生きて行きます」ということを「誓う」ことである。そして、それを人生において実行することである。

そういう天、神、仏に従う生き方の実行を誓うことである。決意を表明し、実行を約束することである。単なるお願いではないのである。いや、お願いもよい。ただ、どのようにお願いにするかである。

歴史の教えるところでは、そのように祈ると、次のような三つの効果が生まれてくるようである。

(イ) 自己のいのちが新しく生れ更る

自分の中に潜む「いのち」の潜在力が芽を出し、すくすくと育ってくる。苦しみや失敗で分裂したり息切れた自己の生命力が纏められ、統合され、秩序づけられ、心身の体勢を整えられて蘇り、人間力が強化され、いのちを創造する力が高められてくる。

私は「られ」と受身の形で述べているが、結局根本は他力なのであって、自力はその中で自力でしかないのである。私は自分の寿命さえ左右できない。

生死をかけて戦いに明け暮れた戦国の武将たちが、このことを一番よく知っていた。だから、地方史、郷土史の示すように、山奥の里にも必ず神社があり、お寺が存在した。だが、強い武将は、「我、神仏に頼らず、敬するのみ」という境地で行動したようである。

(ロ) 自然及び他の人とのいのちが響き合う

いのちは孤立しておらず、自然界と他のいのちと響き合い、活動するものであるから、自己のいのちが活性化してくると、それに応じて人間関係も向上し、集団のいのちも活性化し高

まっていく。それがまた、各人に還元されて、各人の生命力が高まるように作用する。

(ハ) 自己の運命が向上していく

その結果、人生の力が高まる。各人の日々の仕事と生活が改善され、安心とよろこびが増加し、いきいき、はつらつ、とした生活となる。はては運命が好転してくる。

われわれの歴史には、先人もすべて例外なく経験して来た生死の問題がある。個人でも民族や国家でもそうだ。われわれは、死の病とか死の事故に出合っても、生死の観念のもち方により、最後の死の瞬間に、精神の高まりに達することができる。安心の境地に至ることができるようである。

そこで、やはり岸本博士により、生死の観念、救いの考え方を参照しておこう。すべて歴史に現れ、先人たちが実地に試みたものばかりである。

その核心は、永遠に生きることには他ならない。人類の歴史は、つまるところ、この永遠に生きたいという人間の衝動と悲願が推し進める。人は救いを求めるから、生死観こそは歴史を方向づけるのである。それには次のような型があるといわれる(岸本英夫『死を見つめる心』講談社文庫)。

①肉体的生命の存続を希求する

できるだけ自分自身が長生きしたいと願う。長寿は福德であると感じられる。

②死後における生命の永存を信ずる

自分の靈魂の存在を信じ、靈魂は永遠に生き、靈魂は不滅である、と悟る。

③自己の生命をそれに代わる限りなき生命の中に感得する

自分の子孫の永続を願い、子孫の弥栄をはかる。子孫繁栄は最高の福寿である。あるいは、自分の仕事、作品、名声など外形的なものを重視する。

④現実の生活の下一刻一刻に永遠の生命を感得する

「今ここに生きること」に精一杯の努力を集中し意味を込める。今の瞬間を真剣に生きる自己の営みが、大宇宙において、神仏の前において、永遠に記録され永遠に存続すると考える。瞬間は即ち永遠なり。……

祈りは「念仏」と言い換えてもよいだろう。

ところで、作家の高史明（コ・サミヨン）という方が居られる。いわゆる「在日」（朝鮮）の方である。自分の意志でなくそれを超える宿命として、日本に住まうことになった方である——実はわれわれも誕生前にどこの国に生まれるか、自分で決められるわけではなく、出生地は与えられる宿命なのである。

高さんは、子供の頃に言い尽くせないほど辛く、悲しく、歯痒い体験をお持ちだ。それを日本の子供たちにもよく分かるようににと、易しく、諄々と、書き記しておられる。題して『生きることの意味』（ちくま文庫）。さしづめ、個人のいのちの記録であり伝記の一部である。そのように、私には読めた。

高さんは、ご自分の子供さんを亡くされた。唯一のいのちの跡継ぎである子供を失うという出来事に出合われた。

高さんは、親鸞聖人の教えをNHKのテレビ番組の中で説いておられた。私などにはとても解読しきれないほどの問いを、繰り返し、高さんは苦悩の過程において、立てられたのではなからうか。高さんは、この本では、そのことを書いていらっしやらないけれども。

われわれは、ビルの高みから車と人の大きな流れを眺める風の、マクロの歴史論だけに終始してはいけない。そこに留まると、一人ひとりのいのちの微妙な息づかいを秘めたいのちの歴史というものを、知らないままに一生を終るだろう。

私も、小さい頃一九四〇年代に、友の家で経験した「オンドルの温かさ」を懐かしく思い出す世代の一人である。このような私的な体験などは、国家と国家の歴史関係についての議論では、通り過ぎてしまいがちである。私のこの体験も、まさに国

家の関係が陰を落としているもののだが、私はそれを忘れずに、そこからいろいろな意味を学びたいものと思う。

高さんのこの小説は、いのちの歴史のなかの自伝として、ここに記してご紹介しておきたい。譬え、明治維新後の日本の国柄と国際関係——朝鮮併合——について、高さんと私とで、異なる意見を有するとしても……

われわれ人類は、個人であれ、集団であれ、国家であれ、こうしたいのちの意味づけと、永遠のいのちの実現を希望するのではないか。そして人生を終える時、「うん、これでよし」といって、納得して往きたいのではないか。

私は、人類は自由を目指すとか、しあわせを目指すというところから、この歴史論をスタートしたが、結局はこうした永遠のいのちを目指すというべきであつたのである。

思想の歴史は、人類の歴史のあらゆる側面の根源である。歴史の積極的な主原因は人が何を考えるかにあるからである。

これまで人類は、それを宗教という方法で纏め上げ、お互いの間で広めあつてきた。歴史における宗教の役割は決して無視できない。

近代になると、人類はそれに哲学と科学を加えたが、過去の宗教における知恵を、宗派の対立の波間から救い上げ、誰にで

もよく分かつて活用しやすい「コモンセンス」としたいものである。人類のこれからの歴史としては、そこに最も緊急の課題があるう。

夥しい数の人類は、「うたかた」のように浮かんでは消えていく、一回きりしか生きない個々のいのちの集まりである。

歴史とは、そのような川面を漂う泡（アブク）の流れであるう。

しかし、そうではあつても、われわれ各人は、永遠に途切れることはない見える歴史の時間空間の流れの上で、一回限り現れる「いのち」の個体として、自らのいのちの完成、成熟、悟り、というようなものを探求しながら、ひたすら毎日歩んでいる。

ただ、幸なことに、そこに偉大なる人格者（カリスマ）が現れて「教え」というものを恵んでくれる。鉄道の転轍手のように、人類の心の方向をぐいと転換する。そうした教えが、人類多数の心を作り変えるのである。釈迦に帰せられる仏教の教えも、人類の歴史の中で、特にわが祖国日本において、「心の治め方」という側面で、測り知れない作用を演じた。

現代まで、短い般若心経はもちろんだが、もう一つ、日本の仏教に最も広く受け入れられているといわれる法華経の一

節、「苦集滅道」を参照してみよう（岩波文庫、五五〇五六ページ、文章を少し改編しルビ、ゴチを付加）。

謂く、これ苦なり、これ苦の集なり、これ苦の滅なり、これ苦の滅道なり、と。さらに、広く十二因縁の法を説きたもつ。

無明、行に縁たり

行、識に縁たり

識、名色に縁たり

名色、六入に縁たり

六入、触に縁たり

触、受に縁たり

受、愛に縁たり

愛、取に縁たり

取、有に縁たり

有、生に縁たり

生、老・死・憂・悲・苦悩に縁たり

無明滅すれば、行滅す

行滅すれば、識滅す

識滅すれば、名色滅す

名色滅すれば、六入滅す

六入滅すれば、触滅す

触滅すれば、受滅す

受滅すれば、愛滅す

愛滅すれば、取滅す

取滅すれば、有滅す

有滅すれば、生滅す

生滅すれば、老・死・憂・悲・苦悩、滅すなり

これは、われわれの心身の——感覚器官と脳神経系統において行われる心理生理的な作用に焦点を当てた、確実な説であるといえる。ただしこれは、ここだけ読めば、モーゼの「十誡」やそれを超えるとされるイエスの「山上の垂訓」と比べ、人と人との交わりなどに触れておらず、説く範囲が一見狭いように受け取られようが、実は左にあらす。

結局、宇宙自然との、人との交わりも含めて、われわれの一切の行為は各人の心身の在り方から発するのであり、その在り方を浄化すること——修心身——が一切の根源なのだ、と説くのである。

苦集滅道の教えは最も根源の真実に光を当てるための、一つの心実なのである。歴史はすべて、ここから起動する。

国民一人ひとり、また武将や一国の指導者が、無明を脱す

るならば、過去における人類のいのちの無用な犠牲は、いかに減らすことができたことであろうか。
 歴史の行程に現れるせつかくのいのちを、われわれは永遠不朽なるものとしたい。

歴史とは、結局、いのちの活動の連続である。歴史は、詰まるところ、一つひとつのいのちが永続したいという本能的な悲願の生み出すものにほかならない。魂の永遠とか永遠不朽の生命を考えるのも、すべてこのようないのちの連続系列に繋がるものである。

歴史というものは、ほんの一齣の事件にさえ、われわれにも受け継ぐべき永遠の課題が見出される。このことが、歴史の学びにとつては肝要である。それは結局、いのちの永続ということではないだろうか。

現代は、過去の氏族の身分制つまり貴族や武士というような衣を脱いで、「純粹ないのちの活動そのもの」の連続が、取り上げられるようになったのである。

おわりに

——未来を拓く歴史討論を——

この歴史論ノートは、元々、自分の歴史観を整理し直そう、と思い立って書き始めたものである。日本だけでなく、各国にかかわる戦争の事実と戦争責任の議論や、日本の国体（国柄）やナショナリズムなどを巡って行われている現代の歴史論争を、私なりに受け止めようとするものである。だから、学術的な体系性は全くないし、当初からそういうことを狙ったものではない。それは「想定外」のことであった。

今日、いわゆる「自虐史観」——もちろんご本人たちは科学的史観と自認するもの——と呼ばれる立場も、反対に「自由主義史観」——批判派からはご都合主義の反動史観とも酷評される——を主張する立場も、ともに自分たちの政治主義を前提にしている。それは当然である。歴史は心実という性質を帯びざるを得ないからである。そこで、私は私なりに、自分の立場を確かめたいと考えたわけである。

私は自分の立場を、**自律史観** (an autonomous view of history) と命名する。

(一) 自虐史観——日本は根本が悪く未発達なり——

①共和主義史観 民主主義・個人主義・自由主義を採用、天皇制否定。

②社会主義史観 階級闘争主義・社会主義革命を力説、天皇制否定。

(二) 自由主義史観——日本は全悪なのではない、誇るべきものを評価せよ——

(実証的謙遜史観) 近代日本のアジアでの行為は自衛・

正当防衛である。

民族の誇るべき特性を保持し、発揮せよ。

(三) 自尊独善史観——近代日本は全善なり——

近代日本は何も悪いところはない。

周辺国にも悪い行為はしてきていない。

(四) 自律史観——人類の歴史には、日本も含めて、正と負の側面あり——

善は誇り伸長し、悪は反省し償う。

正負を科学的に確かめ、他からの批判を鵜呑みにしない。

いたずらに謝罪ばかりしない、対話を続ける。

欧米、露、中国(漢) 民族の行為も、その正負を吟味せよ(各々、過去四百年間にわたり帝国主義を実行)。

正当なナショナリズムを確立し堅持する。

人類全体の生命価値を発展させる。

いわゆる自虐史観と呼ばれる立場にも、実は二つの系統がある。暗黙のうちにいわゆる欧米型、特にアメリカ型の個人・自由・民主主義を背後におき——日本を批判する——か、あるいはマルクス主義を背後に置く社会主義の歴史観か、いずれかである。

双方共に、特に過去の大東亜戦争は断罪すべき罪悪の塊であると酷評する人たちを含む。一方の共和制民主主義の立場を採れば、天皇制を完全否定する。あるいは他方、それを乗り越えて、社会主義革命を展望し希望をつなぐ。一切の歴史事象を価値判断するのは、こうした歴史観を基調としてである。

これらは多かれ少なかれ、極東国際軍事裁判(東京裁判)のイデオロギーか、さもなければ一九三〇年代の「コミンテルン史

観」つまりスターリン時代におけるソ連共産党が掲げた国際共産主義的史観を、暗に引き継ぐものである。一九六〇年に安保（岸内閣）の年に学生生活を始めた私の世代は、その種の史観が満開する中で育ってきた。

このような二つの史観は、日本という国号と国柄について、事実を確認する科学的立場を取るといふ振りをして、その実は、日本の歴史において圧倒的な役割を演じて来た天皇と皇室（天皇家）の価値を、敬して遠ざけるか、無視するか、できることなら貶め、天皇の存在は人間疎外に直結する階級差別だ、と一方的に決めつけるようだ。

あるいは、天皇は姓もなく、行動の自由もなく、選挙権もない存在で、一人の人格として認められていない、人格なき存在であって、それが国民統合の象徴だ、などというのは、反人間的な扱いだ、と。

だから、建国記念日の制定などに対して、「科学的に見て」事実の根拠がないから断固反対ということになるし、靖国問題や歴史教科書論争では、近隣諸国の時々の政権から政治的に繰り返される日本批判に対して、大いに気を使う、というより媚諂う、という結果になる。東シナ海や竹島、北方領土にも積極的な発言をしない。

その同一線上で、無防備の一国平和主義を唱え、反アメリカ感情を心に秘めながらも、アメリカ製の日本国憲法には一指も触れようとせず、護憲といひながら憲法をいわば化石化させる。改憲の議論などもつてのほかと考える。やはりこれも、旧ソ連・コミンテルンの毒薬性、もしくはアメリカ型の文明・文化の麻薬性に、中毒してしまった頭脳の産物なのだろうか。

他方の自由主義史観という新しい立場は、こういう類いの自由主義史観を根柢から批判しようと思図するものである（藤岡信勝『自由主義史観とは何か』PHP。他方、この自由主義史観には批判があり、その一つのタイプは、松島榮一・城丸章夫編『自由主義史観』の病理（大月書店）。

自由主義史観は、片や欧米一辺倒の単純な進歩史観を戒め、返す刀で自虐的な過去断罪史観を批判し、社会主義史観を葬るという点で、大きな役割を演じている。また、日本民族の誇るべき歴史成果を正面から見つめる。

その結果、日本国民の多くの人々——歴史学界は全くそこまですてに到っていない——は、自分なりの歴史観を打ち樹て、「祖国の歴史に誇りを持ちたい」という意図を明確に表明し始めた。アメリカ占領軍流の自由主義立場や、マルクス主義的立場が意識的に隠蔽したり、曲解したりしてきた歴史論の偏向を正し

たいとする気運を盛り上げた。その点で、歪んだ歴史観を大いに反省せしめた。

私は、この自由主義史観は、日本の歴史を題材としたものであるとはいえ、本来は**自律史観**と呼ぶことのできるもので、世界史において、世界各国に当て嵌まる史観を目指したものであり、最初の最も勇気のある企図であると高く評価したい。つまり、「自由主義」というより「**自律**」（自立）というべきであろう。

それは決して、自国の歴史が世界最高であり万邦無比であるなどと自称するような、かつて今も各国の、そして日本の一部にも存在する独善的、傲慢的な**自尊史観**ではない。まさに正当で謙虚な**自律史観**である。その限りでは、**自律史観**は、日本だけではなく、世界各国にも通じる史観と考える。

ただし、当然この自由主義史観の立場にも、今後に向けて取り組まねばならぬ幾つかの宿題が残っている、と私は考えている。

第一に、私自身の宿題でもあるのだが、これに参加する人々の間で、個人主義・自由主義・民主主義の立場が一方にあり、他方かなり強度に**伝統主義**があり、両者がよく整理されずに混在しているやに見えることである。

現代におけるグローバリゼーションと、各国の特性のある伝統文化とは、いかにすれば調和できるのであろうか。文化は多様なのがよいとしても、どんな種類のものか、どう共存するか、その方法が問題なのだから。

第二に、ここには、マルクス主義・社会主義への対応だけでなく、アメリカニズムへの対応をどう考えるか、という次の問いが秘められている。自由主義史観は、一体、アメリカ文化の「**麻薬性**」をどう見るのか、という問いである。今日まで、この点の吟味が不足しているのではないか。

自虐の方向は、何も歴史教科書の問題にまつわる中国や朝鮮半島や東南アジア向けのものばかりではない。一九四五年から短い年月の間に「**日本革命**」を行ったアメリカという占領国家の文化や思想をどう位置づけるかを忘れると、アメリカ向け自虐が、無意識のうちに深刻化するのである。何もかもアメリカべつたりの態度がその産物となる。

第三に、教育論としては、歴史相対主義の問題が浮上してくる。先にも述べたことであるが、われわれは「過去を裁判すべからず」とはいえないのである。

歴史の——失敗の——中に教訓を読み取るには、なかなか辛

いことだが、やはり現代の最善の立場から、現代の尺度で、過去の先人の成功と失敗を、冷静に比較検討することが不可欠なのである。

祖国の歴史への「誇り」に繋がる要素だけを抜き出すような、安易な歴史編纂とそれに基づく教育では、国際環境の変化に対して十分に強い対応力を秘めた子孫を育てるには、不十分である。どうするか。

批判検討の精神と方法を養い、先人の失敗からも学ぶ柔軟さを、子供たちに、そして若者たちに、徹底して訓練しなければならぬ。そのためには調べる力、考える力、討論する力が大切なのである。

歴史とは、討論の素材でもなければならぬ。

さらに第四に、どうもわれわれは、大東亜戦争についての研究が足りないのではないか。

失敗の研究とは、「今改めて先人の責任を追及する」ということではない。人を憎むのでなく、事実を検証することの必要性を、私としてはもっと強調したい。失敗し負けてしまった戦争であるから、「その敗因を明らかにし今後に活かす」ということである。「後知恵」を大いに発掘しなくてはならぬ。

これこそが、英霊にも、戦場とした諸外国の犠牲者にも、と

もに報いることではないか。国家改革の知恵エネルギーも、こうすることから引き出せるのではないか。この点、坂本多加雄ほか『昭和史の論点』（文春新書）は、役に立つ。

このノートを認めながら、徐々に気付いたことがある。それは、本文にも繰り返し述べたが、家（族）といういのちの単位の重要性であり、また家というものの歴史的な系列である家系の深い意味にほかならない。

現代の福祉国家は、一方で家族を解体していのちの単位を個人（自然人の人格）とし、その個人を集めて国家を構成し、他方でその国家を福祉国家とし、個人が自己の生活を支えられないときに、いきなり国家が福祉政策を担当しようとするものである。

人間間の個人主義化と福祉国家の思想と政策をまっしぐらに押し進めたのが、まさに二十世紀であったわけであるが、そういう個人へと家を解体し、福祉国家を肥大させたことが、各国の財政赤字を膨らませ、国家が本来の任務を越えて過剰な負担を引き受けることになっているのである。このような国家社会の在り方を方向転換し、家の意味を——地域コミュニティと合せて——新たに再構築することが、人類社会の課題ではないか。この点の詳しい展開は、別に書いている『もう一つの経済

哲学』で示したい。

自律史観とは、国家として民族・国民の自律性を強調するとともに、国家・国民といういのち集団の根源にある家族とその家系とに光を当てるという意図をも秘めるものである。隣人愛のことを論じた章で力説したように、われわれ人類は、遠人愛でなく隣人愛から出発し、たえずそこに帰らねばならないのであって、いのちの舞台は家族なのである。家族を軽く見る愛は、国家社会を崩壊させる偽りの愛なのではないか。

歴史を記し、歴史を学ぶことは、「忘却と無知への抵抗」でもある。

今の学生諸君は、半世紀も前の戦争のことについては、忘却というより無知であり、底の浅い受験勉強のせい、事実を教えてもらっていない。かくいう私らの世代も、日清、日露といわれても、私はそれを経験したお年寄りに伺った記憶が微かにあるだけで、実感は全くなく、無感であるといつてよい。人々における歴史とは、移ろい行くものであるのか。

諸行は無常なのである。常に、一切が過去という霧の彼方に消え去るのである。しかし、苦しみも楽しみも、悲しみも喜びも、忘れ去られるからこそ、後の人生が開けてくるのか。だ

から、過去に無縁であることはできないが、過去に囚われ過ぎてもいけない、ということだ。過去は適度に忘れていくのがよい。

私の提唱する自律史観とは、祖国の先人の努力を正当に評価し、その大いなる恩恵と悲願に応えることをもって念願とし目的とする立場である。

第五に、国際関係の側面では、あれもこれも、何でも「自国製だ」と肩を張るのでなく、外国から頂いた恵みにも正当に光を当て、そして外国に与えた利益にも危害にも、よくよく心に向ける歴史論でありたい。

満州事変後から大東亜戦争中、五族共和の理想を旗印に、大学教育にも艇身なされた一人の碩学は、こう遺言しておられる。

日本文化の特性は、他の文化からいろいろなものをふんだんに取り入れて学ぶこと、しかもそれが自国の文化を失わせたり弱体化したりするのでなく、かえってすべてが民族、そして国民本来のものを強くするところにある、と。(作田壮一『道の言葉』全五巻、非売品)。

動乱を生きぬいた人の言葉には味わいがある。

先にも紹介したが、一人の「マルクス主義者」として、誠実

に——しかし方向違いとして——宗教的な境地を求めたとされる人物であって、日本の敗戦の年、一九四五年に大往生を遂げた著名人がいた。巖流という流派を立てた剣豪・佐々木小次郎と時を隔てて周防国岩国で同郷の——今の福井県越前出身との説もある——河上肇博士（一八七九—一九四五）その人である。

河上博士は、その波瀾万丈の、しかし「一路白頭に到る」人生について、同窓の友人・作田莊一博士から「時代を現出人」であったと評された（作田莊一『時代の人河上肇』開顕社）。

その河上博士の親戚の家に「熔古鑄今」（安政六年、一八五九年の書）という扁額が現存するそうである（河上莊吾『河上肇と左京』かもがわ出版、二八ページ）。これをどのように解釈するか。

歴史においては、われわれの生き方は「温故知新」であり、「述べて作らず」であり、根本において「諸行無常」である。しかし、やはり単なる「自然」（じねん、天道）のみでなく、人が作るという「作為」（さくゐ）としての創造の部分（人道）なしには、人類の歴史はあり得まい。熔古鑄今は、われわれ人類の歴史の本質であるのかも知れないが、問題はいかに作るかである。

人類は、グローバル時代に入って、地球的な共通要素と各国文化の特殊要素をとともに尊重し統合するグローバル（グローバル＋ローカル）な歴史論を求められる。それゆえ、これからの自律史観とは、各国毎に存在しうるものであって、かつ、一国史観を内に含みつつ「地球史観」を目指すものでなければならぬだろう。

分け登る 麓の道は多けれど
同じ高嶺の月をこそ見れ（古歌、原作不詳）

謝辞

(一)

このノートは、私の学問上及び人生上の恩師である難波田春夫博士と石津忠(温也)先生とに捧げる。

お二人とも既に故人となられたが、お二人の関係は、譬えは適切でないかもしれないが、マルクスという第一バイオリンに対し、第二バイオリンとして第一バイオリンを支えたエンゲルスと、彼の二人の関係を想起させるものがあつた。

難波田先生は、昭和六年に東京帝国大学を出て、「暗い谷間の時代」(大河内一男「元東大総長の言葉」)と評された頃に、長かりし助手、及び助教授の時代が重なりつつも、早くから鬼才を謳われ、『国家と経済』全五巻や『経済哲学』などを著わして洛陽の紙価を高めた。

難波田先生は、文学部・和辻哲郎教授の日本倫理思想史、法学部・丸山眞男教授の日本政治思想史と並んで、経済学部で日本経済思想史を担当した。その膨大な講義録の一端は『日本社会経済思想史』(元、前野書店刊、そして現在は『著作集』(全

十巻、早稲田大学出版部)に収められている。

先生は、一貫して国家と国民の在り方を探求され、現代経済学を総覧するとともに、それを構築し直すために理念・導きの糸を求めて中国とギリシヤの古典——広い意味での経国済民(経済)——及び祖国日本の古典、『古事記』、『日本書記』の研究に打ち込まれた。家・郷土・国家という三重構造論は、その成果であり、今まさに示唆するところが大きい。

さらに先生は、もちろん一九三〇年代、真剣な日本人なら誰も避けて通れなかった「大東亜共栄圏」の建設という時局問題にも、研究のエネルギーを傾注された。『経済哲学』には、近衛文磨の下に集まった「昭和研究会」の人々の手になる国家改革と共栄圏構想に対する批判検討の精髓が語られているので繙かれない。

難波田先生は、しかしそれが因で、一九四五年の敗戦とともに、東京大学を辞し、かつ教職追放の網にかかり、昭和二十七年まで苦難の道を歩まれた。追放の理由は、当時の政府(実はマッカーサー占領当局)の指令を見れば、「国家主義・軍国主義の学問を研究し推進したから」というにあつた。

もちろん先生は、その追放の間にも学問研究の灯火を絶やすことなく、『建設の哲学』『スミス・ハーゲル・マルクス』『民

主義の弁証法』などの新しい研究を矢継ぎ早に発表し、早くも始まった資本主義と社会主義という東西対立の狭間で、人類と国家の行くべき道を模索された。先生はその間、支えられた方々のご苦勞、慈愛に感銘するほかない。

先生は、物事の本質を非常に徹底して掴むという方であり、そのためには自己の従来の研究さえも廃棄し絶版するに吝かではなく、戦前の評判の高かった著作さえも、そのように宣言された。この厳しさと潔さも、かつての同士たちから、時代迎合し節を曲げたものである、と誤解され批判を受けたと伝えられる。友といえども、他者の心は測り難し。

しかし、それは決して時代がアメリカ型の民主主義になったからという時流迎合の故ではなく、弁証法的にそれら従来の研究を保持しながらも、より深いより高い基礎づけを求めての事であった。

難波田博士は、絶えて久しくそれについて語られることなかった日本の国体と天皇の問題について、晩年、われわれ次なる世代の者に、時折、本音を漏らすようになられた。天皇というものを、単に古典の記述により根拠づけるのみでなく、むしろそれとも不可分にかかりつつ、現実の長い歴史を根柢に秘めた国民の「集合無意識」（カール・ユング）に根差すものとさ

れた。国民主権観念と矛盾しつつも、それなしには永遠の日本国家が成り立たないという関係にあるものとして、位置づけられた。天皇制度と民主主義とは、互いに矛盾し合いながら、他無しには日本が存在し得ない、と説かれた（『近代の超克』行人社、参照）。

このように、絶えず改訂され発展する博士の学問体系において、一九八〇年、九〇年代頃に、「日本の国体」が新たな基礎づけを与えられた。博士は、表向き語られない中にも、日本の国体についての思索の灯火を消されず、若いときから一貫して貫かれたのである。幸いにも私は、その点を先生の歩みとともに親しく窺うことができた。

博士にはまた、皇室について、「知る人ぞ知る」というべき重要な貢献がある。美智子さんが民間から皇室にお嫁入りなさるかどうかが問題が決まらないでいるとき、博士はヨーロッパの王室についてドイツ人の書いた論文をそれとなく日本で紹介されていた。王族の結婚に関するもので、私も頂戴して読ませていただいたが、近親結婚の弊害を指摘し、子孫永続の条件を研究するものであったと記憶する。正しく「春秋の筆法」であった。

真に学問をする者は、その学問により、国家社会に貢献なさ

るのである。

当時それが、皇太子の教育係であられた小泉信三博士のお目に留まり、重要な作用を演じたというのである。難波田博士は、日本の国体について、無言のうちにも、学問的に、支える営みをお忘れてなかったたのであろう。その意味もあって、このノートでは、日本古典に関する博士の元の見解を、本文にしばしばご紹介させていただいた。『著作集』には入っていないものが主である。

かたや第二バイオリンである石津忠先生は、静岡県の神官の家系のご出身と承っていたが、戦後は「全国食糧増産同志会」の運動に挺身され、難波田先生を追放中の時代から陰に陽に支援され、全国各地の農村建設のためのセミナーにも連れ出し、農民との交流も図るというお世話をなさった。ちなみに、石津先生は、同士とともに、後に「生産日本社」(株)というメーカーの創業者となられた。

象牙の塔にこもっていた高名な学者が、このことによって、「先生、そんな話し方ではさっぱり分かりません」といった遠慮のない反応の中へと、一挙に放り込まれたのであった。

遠い親戚筋の人・荒川治夫氏——父の兄の妻の親戚——は、

満州の農業指導に行っていた人だが、当時のセミナーの実情を、昔こう話して呉れた。私の学生時代、博士の講義は、書かれた文章と同様、名調子であったが、その頃の修行も役立っていたのではなからうか。

実は私は、この荒川氏から、石津先生と難波田先生とを、紹介して頂いた経緯があるのである。微かにとはいえ、親類縁者というものの不思議な縁を感じる昨今である。

石津先生は、三〇代の若い私に、宿題を与えて下さった。世界史を踏まえて日本の国体に関する研究を完成するように、という宿題である。この宿題は執拗底音——丸山眞男教授——の如く、永遠に燃え続ける聖火のように、北斗七星のように、その後私の心から決して離れる事なく、私の思索を導いて来ている。

東西世界の資本主義と社会主義の比較研究、発展途上国の研究を行いながらも、この聖火は私の視野から外れることはなかったし、今ますますそうである。このノートは、その意味で、古い宿題への一応の、しかし最初の、回答なのである。

(二)

次に、この歴史論ノートの執筆は、誰よりも、廣池幹堂先生(廣池学園及びモラロジー研究所の理事長、元麗澤大学学長)

の直接間接にわたる学問的、教育的刺激により、推進されたものである。先生は、本文でも引用した歴史家、道徳研究者、教育家であった廣池千九郎博士の曾孫に当たられ、博士の真の遺志を継がれる方である。博士は、福沢諭吉先生の同郷人で、若い頃に『中津歴史』というものを著して、地方史の先駆者でもあった。

「祖国の歴史に誇りを持つ」という先生年来の呼びかけは、先生より少し古く、戦中と戦後を重ねて生きて来た私にとって、避けて通れない課題と受け止めている。先生のご発言からの強烈な刺激に心から感謝申し上げたい。

むろん、個々の事件や事項に関する結論とか評価は、必ずしも先生と同一ではないであろうが、それは歴史認識における心実上の個性として御海容頂けるものと考ええる。

いつものように、このノートも多くの人々のご協力を戴いて形を成すことができた。身近なところで、濱伸洋君——目下、インドの国立ネルー大学大学院にて研究中——には、精神的な肉体労働である面倒なコンピュータ作業を引き受け、かつ原稿を読んでは若者世代の視点からいろいろな質問を発して頂いた。また学生の多田健児君も、途中からその作業にバトンを受けて参加し、口うるさい私の注文によく応えてくれた。今はその後をロンドン大学留学から帰った栗山聡美君が継いでくれて

いる。ヤングパワーはすごいエネルギーと適応性を発揮する。

永井達彦さん、中道美代子さんにも貴重な意見を提出していただいた。自分の背中では読めないものだから、傍からの意見や質問は、物を考えて書いていくときに、またとないバックミラーとなる。原稿の早い段階で染谷健太郎君に、その後には木暮恵子さんに、資料集めでお世話になった。木暮さんは、作家の塩野七生氏のことを始め、ローマ帝国に関する知見と文献をたくさん教えて下さった。

歴史は国民万民のものである。在野の現代史研究者である小杉健は、特に大東亜戦争、太平洋戦争、日中戦争にかかわる戦争責任の問題、極東国際軍事裁判の法的性質、あるいは戦争の諸々の事実関係などについて、非自虐史観の立場での鋭い問題意識によって、多大の触発を頂いた。

ご高齢の青年学徒、徳田佐太郎さんには、本居宣長はじめ日本古代についての思想研究で種々、ご教示賜った。その一途な探求精神は、戦後教育を受けた「ふらふら世代」の一員である私にとって、自分の歴史意識に正直な背骨を入れる上でとても有益であった。こうした方々との論争点は、本書のあちこちに伏せ込んで隠し味となっている。私の思考の背骨はなおも曲

りが残っているかもしれないが……。

テロ問題については、国際法学者の梅田徹教授が、国連決議を巡って、冷静な判断をするために不可欠な論点を指摘して下さった。

元麗澤高校教諭の服部道雄さんには、日本史上の事実全般について、私の早とちりを数多く訂正して頂いた。残る誤りはいうまでもなく、私の責に帰する。

名越二荒之助先生は、お立場について既に一定の評価の定まったお方のように見えて、実に柔らかい実証的な頭腦の持ち主として、数々の資料をご教示下さった。篤く篤く感謝申し上げます。

また、千葉大学名誉教授、多田顕先生には、日中戦争に関して、ご尊父の故・多田駿陸軍大将の文章その他、貴重な資料のご惠贈に浴した。御礼の言葉が見つからない。

学校における専門歴史教育の観点からは、京都府立高等学校教諭の竹之内治男先生に、公務ご多用中、執筆の途中の段階で草稿をご一読下さり、特に古代の部分での年代区分、東アジアの民族移動の問題について幾つかの疑問点をご指摘いただいたが、今回の出版ではご指摘を十分に活かさきれいなと反省している。

同じく元高校の歴史担当教諭であった日下部年伯先生には、日頃から何かと世界史の事実について、私に不足する知識をご教授賜っている。有り難いことである。現役の社会科担当教員、多田健芳さんは、現行テキスト類について、たくさん資料を提供くださっている。

いづれにしても、このノートはかなり思い切った記述——一見、国粹主義にして、実は左にあらすだが——を提示している。その製造物責任と説明責任が私自身にあることは、申し上げるまでもない。

このノート執筆は、過去およそ十年くらいに亘るが、その後半から、郷土史というか地方史というか、国家のレベルと無関係ではないが、国家の歴史そのものではない地域の歴史の重要性に気づいた。例えば、陸奥の蝦夷たちが大和国家に統合される過程とか、前九年の役及び後三年の役の記述などには、大いに興味を引かれるものがある。

気づきのきっかけは、年来の畏友、佐々木周一郎氏（元秋田県立高校教師）が、先頃完成した分厚い力作『山内村史』（全三巻）を贈ってくれていたことにあった。氏の地道なご努力に敬意を表したい。

栃木県と茨城県の県境の幾つかのお店で「愛郷無限」（故・梶山静六氏の揮毫）という揮毫を拝見したが、全く同感であ

る。愛国無限、愛郷無限。……

なお、このノートでは、比較の意味で、西洋世界の形成者としてのキリスト教のことに若干だが言及している。キリスト教の知識については、私は学生時代にドイツ人、吉祥寺の教会のベック先生のドイツ語聖書学習会にちよつと出たことがあるけれども、ほとんど素人である。そこで、大久保俊宏・美香子夫妻に質問し、『聖書』のどこに何が書いてあるかなど、多くをご教示いただいた。俊宏氏はある自治体で福祉関係の仕事に従事し、美香子氏は米と英にて高校から大学院まで学び、長年キリスト教文化を呼吸し、かつまたカウンセラーとしての経験を持つ。もちろん、このノートでのキリスト教の引用と解釈は私の個性から出ており、一切私に責任がある。

最後に、このノートを書き終えるころの二〇〇四年六月中旬、『ミズーリ艦上の外交官』（広池学園発行）を手にした。この本は、高名な外交官・加瀬俊一先生と、外交研究家・花井等博士との対談からなり、就中、大東亜戦争当時の日米外交の現実を生々しく伝えるものである。本書を読む機縁を与えて下さった花井教授に衷心より感謝したい。思考実験の一つとして、現在から出発して「歴史を逆行して学ぶ」という教授の示唆には、この上なく同感である。

一九三〇年代の日米交渉は、私のこのノートで特別重視したテーマの一つであるが、本書を一読し、外交官の手腕というものについて改めて検討すべきであると感じた次第である。故・諸橋襄先生——終戦当時、枢密院書記官長、実は私の法学の師——の本文に引用した証言の一端からしても、政治家と、軍人と、外交官の、一国の命運を左右する責任は小さくはない。加瀬証言と同様、諸橋証言の全容が早く公表されることを願いたい。

このノートで個々の事柄についての結論は、私自身の癖——一つの立場から割り切らず、あれもこれもと参照する——のある判断傾向を脱していない。事実についての勝手な思い込みも免れていないであろう。しかし、ともかく、自分が読者にお供えする料理は自分の責任で作るほかない。ご批判は大歓迎。どうか、ご意見をお寄せ下さい。

顧みて、このノートが、所期の目的を果たすことができているかどうかは、少々キザツポイけれども、先人の言い方を借りれば、まさに「本書をして語らしめる」ほかないと思う。

なお今回、少し漢字を増やしてルビを多くつけた。留学生や若い一般学生の皆さんが読んで討論するのに便利なように、という老翁心としての配慮からであるが、感じを多用すること

で、漢文化とやまと言葉の偉大さを併せて学ぶことが出来るのである。

*編集者註

本稿は故永安幸正教授（二〇〇七年九月三日逝去）が二〇〇五年にまとめた、全十二章におよぶ歴史論の一部（第十二章、おわりに、謝辞）である。

文中の誤表記と思われる表現に関しては、原文を尊重し修正を加えず適宜（「ママ」というルビを施した）。

生前より各章ごとに掲載してきたが、本稿は、その完結編である。以下、全体の章立てと合わせて、掲載号及び発行年月日を記す。

はじめに

..... 第五四号／二〇〇四・九・三〇

いのち史観とエコロジーの叡智（第一章）

..... 第五四号／二〇〇四・九・三〇

歴史には、素・真・心の三実がある（第二章）

..... 第五四号／二〇〇四・九・三〇

歴史は、いのちの反発と和合によって動く（第三章）

..... 第七四号／二〇一五・二・一〇

歴史には、価値の相対主義と絶対主義がある（第四章）

..... 第五六号／二〇〇五・九・三〇

歴史には、神話という心実が不可欠である（第五章）

..... 第五七号／二〇〇六・二・二八

歴史から、人生心理学を学ぶ（第六章）

..... 第七五号／二〇一五・七・三一

歴史には、国家盛衰の因果律が現れる（第七章）

..... 第五八号／二〇〇六・九・三〇

歴史は、国際間の相互理解を促進するか（第八章前半）

..... 第五九号／二〇〇七・二・二八

歴史は、国際間の相互理解を促進するか（第八章後半）

..... 第六〇号／二〇〇七・九・三〇

歴史は、民族の魂が創造する（第九章）

..... 第六三号／二〇〇九・二・二八

歴史は、いのち共同体のたえざる再構築なり（第十章前半）

..... 第六五号／二〇一〇・三・三一

歴史は、いのち共同体のたえざる再構築なり（第十章後半）

..... 第六六号／二〇一〇・九・三〇

歴史において、大義にいのちを捧げるとは（第十一章）

..... 第七二号／二〇一四・三・一〇

歴史は、永遠のいのちを目指す（第十二章）

..... 第七七号／二〇一六・五・三〇

謝辞

..... 第七七号／二〇一六・五・三〇

『歴史論ノート』の完結にあたって

道徳科学研究センター長 大野正英

故永安幸正教授が二〇〇五年にまとめた、全十二章に及ぶ「歴史論ノート」を十年以上にわたって『モラロジー研究』に掲載してきました。二〇〇七年に先生がご逝去された後も、遺稿として掲載を続けてまいりましたが、今回最終章である第十章その他の掲載をもって完結することとなりました。

早稲田大学教授、麗澤大学教授を歴任され、またモラロジー研究所道徳科学研究センターのセンター長を長く務められた永安幸正先生は、経済学、社会システム論を専門領域とされつつ、非常に幅広い領域にわたって研究を展開され、また積極的に社会問題に対して発言をされてきました。この「歴史論ノート」は、そうした膨大な研究の蓄積に基づいて、歴史に対して深く切り込んだ大著であります。論文の形はとっておりませんが、それだからこそまさに自由自在に時空を往来し、多くの古典や名言、古今の事例をふんだんに引用して、多角的に歴史が論じられています。

非常に豊かな内容を含んだこの論稿の全体像を概観することは困難なことですが、あえてその特徴を一つあげるならば、歴

史を「いのち」という視点で捉えるという明確な姿勢が貫かれている点が指摘できます。この場合、いのちと言ってもそれが意味するものは、単に生物の個体としての人間の生命にとどまらず、同時に人格を持った精神的な存在としてのあり方も表しています。また、個人は、他と切り離された個としてではなく、家族から始まり、地域社会、国家、人類社会へと広がる重層的な共同体におけるつながりの中で生きる存在です。また同時に、過去から現在、未来へと続く時間的なつながりの中にそれぞれ人間は位置づけられます。

この歴史論ノートの中で描き出された「いのち」は、まさにこのような時空を超えたつながりの中で生きる個人と人間集団を意味しています。そして、歴史とはそのような「いのち」が時に争い、時に協力し合いながら、栄枯盛衰を繰り返していく「いのち」の流れであると、永安先生は捉えています。

「はじめに」の中で、この論稿に込められた二つの問いが紹介されています。一つは、人類はいかにすれば争いを減らして平和を実現することができるかという問いであり、もう一つは、日本という国家と日本人という国民集団が、いかにして永続し発展できるかという問いです。国際社会が混迷の度合いを深め、国内外に問題が山積している現在、日本の、そして人類社会の将来に対する先生の強い思いが込められたこの論稿の持つ意味は非常に大きいものであるとあらためて感じています。